
十色のラジオ放送局

旅がらす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十色のラジオ放送局

【Nコード】

N8315J

【作者名】

旅がらす

【あらすじ】

『十色のキセキ』アナザー版。キャラクター解説から誕生秘話、裏話、特別番外編、座談会と称したキャラクタートークなど…
…。一味違った『十色のキセキ』をどうぞ！

1)挨拶

トイロ「あ、あ、あー。テストテスト。マイクテストなんだよー」

シレン「……何してるの、トイロ?」

トイロ「見ての通りさー。マイクテストなんだよー」

シレン「いや、うん、そうだけど……。だから何で?」

トイロ「『十色のキセキ』アナザー版、『十色のラジオ放送局』のためなのだよー」

シレン「ああ、いつの間にか消えてたあれね。確か、まあちゃんとアーくんがMCだったんじゃない?」

トイロ「作者自身で、やり直すことにしたんだってー。で、ここでもボクがMCをすることになったのさー」

シレン「へえ、そうなんだ。主人公って大変なのね……」

トイロ「ボクはこつこつこの好きだから良いんだけどね。楽しいし」

シレン「それで、今回はどうなるの?」

トイロ「基本は変更しないみたいだね。だから、今回はそのお知らせだよー」

シレン「なるほど……。でも、作者は? あの人は出てこないの?」

トイロ「基本裏方なんだって。ほら、あそこでカンペ見せてる」

シレン「裏方好きね……、ほんと」(汗)

トイロ「ではでは。アナザー版の説明だよー」

トイロ「アナザー版『十色のラジオ放送局』は、本編に登場するキャラクター説明、裏話、誕生秘話なんかを語る場なのだ。ボクたちのあんなことやこんなことが丸わかりなんだよー。多分」

シレン(多分!?)

トイロ「キャラクター解説では、そのキャラに関する質問も受け付けているのだ。シレンのスリーサイズとか、サトルのスリーサイズとかが気になる人はどんどん質問したまえー」

シレン(例題それだけ!?)

トイロ「あ、質問はメッセージで受け付けているよー。名前を伏せたい人は、ラジオネームを添えるのだよー」

シレン「だから『ラジオ放送局』なのね……」

トイロ「『十色のキセキ』が金銀リメイク記念作品というものもあるけどなー。ご応募お待ちしているのだ。どしどし送ってきたまえー」

トイロ「また、『十色のキセキ』の番外編も放送するよー。とりあえず、明日のバレンタインに一話投稿予定なのだー」

シレン（……絶対そのために書いてるわね）

トイロ「イベント毎に書けたら万々歳。こちらも楽しみにしてくれたまえー」

からす（いや、ハードル上げるなよ！）

シレン「……トイロ、何かカンペが」

トイロ「気にする必要はないよー。また、アナザー版では、他作品とのコラボも予定しているよー。例えば、世界観の違うポケダン物とかかなー」

シレン「どうコラボするの?」

トイロ「例えば、キャラクター解説で質問しに来てくれたりとか、活報でイベント予告した際にゲスト出演してもらうとか?」

シレン「まだ考え中なのね、そこは……」

トイロ「現在書き進めている話にいろいろオリジナル料理が出てくるから、それを一緒に作るのも楽しそう〜なのだ」

シレン「なるほど……」

トイロ「んー。今回はこんな感じかなー。次回は、『十色のキセキ』ができるまで”を予定しているよー”

シレン「その後すぐに、バレンタインスペシャルを予定しています。主人公は……、あら？ 私の知らないキャラだわ」

トイロ「むふふ〜。それは投稿してからの楽しみなのだ〜。では、また次回会おうではないか〜」

シレン「お便り待ってます」

1)挨拶(後書き)

次回は13日の夜に更新予定です。

メッセージ、お待ちしてますw

ACT・1 『十色のキセキ』ができるまで

トイロ「はじまったよー、十色のラジオ放送局。メインMCのトイロなのだ〜」

シレン「アシストのシレンです」

トイロ「記念すべき第一回は、作者である旅がらすとのトーク。お題目は『十色のキセキ』ができるまで”だよ”だよ」

シレン「それではからずさん。よろしくお願いしますね」

あいゝ。了解しましたよ〜。

トイロ「今回は一問一答形式で行かせてもらうよ〜。じゃ、最初の質問ね。どうしてポケモンのFFなんて書くこと思ったんだい？」

元々、モンハンのFFで詰まっていた時の気晴らし。

シレン「…………え？」

トイロ「…………怒ってもいいかね？」

駄目。でも、今では書いて良かったと思ってます。ポケモン作家の方々との交流も楽しいですし。

トイロ「…………気を取り直そうかね。じゃあ、次の質問だよ。最初はどーという話にする気だったんだい？」

ゲームのまんまかな。ウツギ博士からお使い頼まれて、んで、いつの間にかポケモンマスターを目指す話。

シレン「でも、トイロはお使い頼まれてないし、ポケモンマスターを目指してもいいわよね？」

うん。やっぱりネタ被りしやすいし、書くならオリジナルが良いかな？って。

トイロ「そうか。では、どうしてこの題材にしたんだい？」

神話が好きで、それに関わる話を書きたかったので、シロナというキャラクターをヒントに主人公を考古学者の家系に。

でも、一番は、モンハンのFF『魂の樹形図』のテーマが“夢に向かって邁進する”だったので、それ以外のテーマで且つ“夢”に着目したものを書きたかったから。

夢とか目標が好きなんです。だから、冒険ものも大好物。

シレン「じゃあ、このお話のコンセプトって何？」

夢を持たない主人公　トイロが夢を持った人々と触れ合うことで成長する物語……かな？

『魂の樹形図』を『元々あるモノクロ絵画に色を付ける』と例えると、『十色のキセキ』は『真っ白のキャンパスに何を描くのかまだまったく決まっていない』状態です。

シレン「トイロの髪の毛を真っ白にしたのはそれが理由なの？」

詳しい話は本編とキャラクター解説で言うけど、理由の一つではあるかな。世界を先人観も全く無しに見るキャラクターにしたかった

ので、『何も無い』状態をイメージする『白』をキャラクターカラーにしました。

トイロ「そうなんだ〜。別にアルビノとかではないんだよね、ボク」
アンタ黒目でしょうが（汗）

トイロ「では、神話をメインに置いているのに何故ジヨウト地方が舞台なんだい？」

キーワードにあるように、これが『金銀リメイク記念作品』だから。それに、ポケモンゲームの中で一番好きなんだ。これ。

シレン「唯一二つの地方を冒険できるものね。他のは同じ地方だけだし」

そうなんだ〜。二部構成って好き。

いつか日本全土を旅したい。ポケモンで。

トイロ「DSがパンクするよ〜」

あ、ちなみに別にジヨウトとカントーだけが舞台じゃないよ？

いつかトイロにはハウエンやシンオウにも行ってもらうからね？

ト・シ「……え？」

もう少し早く書けるようになりたいな……。終わらなそう（汗）

シレン「（流した!?!）……え、えっと、このお話の時代設定ってどのくらいなの？」

イメージとしてはゲーム（HG・SS）より少し後。
だからジムリーダーたちもゲームより少し成長した姿をイメージして書いています。

トイロ「ハヤトさんも僕らより年上だったみたいだもんね」

シレン「これから会うトレーナーさんでゲームから来ている人たちがどうなっているかも楽しみね」

なるべく容姿以外では変更はするつもりないですけど。
やっぱりイメージがありますし。

トイロ「……さて、こんなところかな」

シレン「そうね。ところでからずさん、もう十五日だけど？」

……バレンタインスペシャルが……。

トイロ「今からすぐに書きたまえ」

今日中に投稿します！！
では！

シレン「あ、行っちゃった……。今回出た話以外に、『十色のキセキ』製作に関する質問がありましたら、旅がらすまでメッセージをお願いします」

トイロ「キャラクターに関する質問もよろしくなのだ。では、また会おう」

ACT・2 バレンタインスペシャル(前書き)

すみません。結局二日遅れになっちゃいました。

では、バレンタインスペシャルです！
どうぞ！

ACT・2 バレンタインスペシャル

『十色のキセキ』バレンタインスペシャル

二月十三日、夜

ワカバタウンの外れ、ジョウト地方とカントー地方の境となるト
ージョウの滝を一望できる小高い丘の上に、小さな屋敷がある。

その屋敷に住むポケモン “やいばポケモン” エルレイドは、
日課の一つである夜の見回りをやっていた。

この屋敷 別名“放蕩娘のポケモン屋敷”と称されるこの家に
住んでいるのは、まだ十三になったばかりの少女とそのポケモンで
あるマリルとリーフィア、そしてエルレイドの一人と三匹である。
他にも、少女がどこからか連れてきた怪我をしたポケモンたちも屋
敷の庭を借りて暮らしているが、彼らは野生ポケモンであるし、怪
我が治ればこの屋敷を去っていく。だから、本当の意味でこの屋敷
で暮らしているのは彼らだけだった。

屋敷の見回りの大半を終え、残りはキッチンだけとなっていた。
エルレイドが小さなランタンを手に一回のキッチンへと向かうと、
キッチンの明かりが廊下に漏れているのが見えた。

……おかしい。エルレイドは持っていた懐中時計を見る。もうす
でに夜中。さすがにトイロはもう就寝しているはずだ。

(まさか、泥棒か……?)

侵入者の疑いを持ったエルレイドは、いつでも攻撃できるように

肘から緑色の刃を展開させる。自然と音を消して歩く。ランタンの炎も消した。そつと、そつと、キッチンへと向かっていく。

あと数歩で、キッチンの前に着くというとき、キッチンの扉が静かに開いた。

「ッ！」

すかさず刃を構える。エルレイドの目つきが一気に鋭くなる。

だが、

「……………ファイ？」

ドアから顔を出したのは、リーファイアだった。とぼけた様子で、刃を展開させているエルレイドを見上げている。

見知った顔に、エルレイドは少しだけ肩の力を抜いた。リーファイアは、トイロが「アーくん」と名前を付けて可愛がっているポケモンだ。確か、まだ3才にしかならない幼いリーファイアである。

「ルーにい。どうしたの？ 怖い顔して」

不意に、リーファイアが話しかけてきた。まだ幼いリーファイアの言葉遣いは非常に拙い。ちなみに、「ルーにい」とはエルレイドのことである。トイロがエルレイドのことを「ルーくん」と呼んでいるので、それを真似しているのだ。

エルレイドは肘の刃をしまうと、小さく首を横に振った。

「いや、何でもない。それより、もう夜中だ。お嬢様も就寝しているはず。お前も寝なさい」

おそらく、お腹が空いて起きたので、何かをつまみ食いしにでも来ていたのだろう。以前にも似たようなことがあったので、エルレイドはまたそれだと勝手に合点を付けた。

ところが、リーファイアはふるふると首を横に振った。

『トイロちゃんならここにいるよ?』

『……は?』

言葉を失いかけた。トイロがキッチンにいる? こんな夜中に何故?

しかし、どちらにしる感心できないことだ。エルレイドは小さくため息をついた。

『分かった。では、お前もお嬢様ももう寝なさい。私はお嬢様に注意せねば』

そう言つて、エルレイドがキッチンへと歩み寄ろうとすると、それまでボケーンとしていたリーフィアが、突然慌てたようにエルレイドの前に躍り出た。

『だ、だめだよルーにい! 今キッチンに入っちゃダメなんだ!』

『何? それはどういう意味だ?』

『いいからルーには入っちゃダメなの! トイロちゃんに怒られちゃう!』

慌てて言いながら、頭で必死にエルレイドの足を押し、進行を阻むリーフィア。その様子に、エルレイドは首を傾げた。

『おい、今が何時か分かっているのか? もう寝る時間をとくに過ぎていゝるんだぞ』

『それでも今はダメなの!。ここは何にもないから早くどっか行つて!』

何もなければ入つても問題ないだろうに。リーフィアのおかしな言い分に、エルレイドは更に首を傾げた。

『……意味が分からないのだが』

『とーにかーく! 今夜はここに入つてこないで! 怒られるのは僕なの! トイロちゃんが怒ると怖いので! だからダメ!』

駄々を捏ねられた。その場でジタバタと暴れまわるリーフィアに、エルレイドは肩を落とす。このままでは埒が明かなそうだ。

と、そこで、再びキッチンのドアが開かれた。と同時に、キッチン

ンからほんの少しだけ甘い匂いが香ってくる。

「どうしたのだ？ アークくん」

ドアから顔を出したのは、屋敷に住む唯一の人間である白髪の少女、オトナシ トイロであった。トイロの手には、スプーンが握られている。

「フイ〜」

それまでエルレイドの足元で暴れていたリーフィアが、トイロの姿を確認した途端に素早く起き上がり、彼女の足元へと駆けて行った。そのまま、トイロの足に嬉しそうにすり寄る。一方のトイロは、廊下に佇むエルレイドに気づくと、気まずそうに顔をゆがめた。

その表情の変化に、エルレイドはまた首を傾げる。

(……本当にいたのか……)

リーフィアに聞いたときは「まさか」と思っていた。だが、実際にそこにいたトイロとその気まずそうな表情を見て、エルレイドは苦笑いを溢す。

(お嬢様もお腹が空いたということか……)

エルレイドの記憶が正しければ、トイロは確か夕飯の時に少しだけそわそわしていた。食べる量もいつもより少なく、ただ良く台所にある調理器具に目を走らせていた。

いつもより食べなかつたから、夜になって空腹を覚え、同様に空腹になったリーフィアを連れてこっそりつまみ食いに来たところだったのだろう。エルレイドをリーフィアが必死に止めたのは、その姿をエルレイドに見られるのがいやだったからなのかもしれない。

そう結論付けたエルレイドは、部屋に戻るよう促そうとトイロの元へと歩み寄ろうとした。

だが、

「あ、ルーくんダメ！ 今は入ってきちゃダメ！」

(………は?)

意味が分からなかった。何故、今日はここまでキッチンへの入室を拒まれなければならないのだろうか。

エルレイドは頭を悩ませつつも、トイロに自分の意思を伝えようと懐中時計をトイロに見せた。

「エル、エルレイツ」

「うん。分かっている。もう寝る時間であることは重々承知しているよ。でも、今日だけは見逃してほしいのだ」

エルレイドの意思は理解しているが、それでも退くつもりはないらしく、トイロは頷きながらも上目遣いでエルレイドを見上げてきた。あどけない少女の瞳に懇願され、エルレイドは少しだけ罪悪感に駆られる。

更に、トイロのどこか必死さを帯びた様子は、エルレイドの中にある“本能”を強く刺激した。

(……しょうがない)

逆らうことのできない“本能”に負け、エルレイドは折れた。仕方ないように一度だけ肩を竦めると、懐中時計を静かに閉じる。

エルレイドのその仕草に許しを得たのだと察知したトイロは、すぐに顔を明るくさせた。

「ありがとう、ルーくん！」

トイロはそれだけ言うと、すぐにキッチンへと引っこんでいった。リーフィアもそれに続いてキッチンへと入っていく。

廊下には、エルレイドだけが残された。静かに響くドアがしまる音。それを聞き届けたエルレイドは、小さく肩を竦めながら踵を返そうとして、

「あー、まあちゃんダメだよ！ そんなことしたら火傷をしまっただけだよー！」

やっぱりやめた。すぐさまキッチンの前まで駆けつけ、ドアを開けようとする。

だが、

ありがとう、ルーくん！

「ッ！」

脳裏に過ぎるのは、先ほどのトイロの笑顔。もしここで自分がドアを開けたら、それはトイロからの期待に“裏切る”行為になる。あの笑顔を壊すことになる。

トイロを心配するが故に、エルレイドはその後キッチンに入ろうか入らまいかの葛藤に揺れながら、結局一晩中キッチンの周りをウロウロすることとなったのだった。

トイロが何か叫ぶたびに、エルレイドのそわそわ度合いが右上がりになって行ったのは、また別のお話。

二月十四日、朝

結局、日課の一つである朝食を作る時間帯になっても、エルレイドはキッチンに入ることができなかった。エルレイドが朝食を作るためにキッチンに入ることができたのは、いつもよりも二時間遅い朝の八時を回って少し経ったころ。

おかげで、いつも通りの凝ったものを作ることができず、短い間に手早くできるトーストとベーコンエッグ、それにインスタントのコーンスープという少し適当な朝食となってしまった。

「……………」

トイロはトーストを齧りながら、そわそわとした表情でエルレイドを見ていた。その隣では、彼女の一番のパートナーである“みずねずみポケモン”のマリルが、その様子を微笑ましいものを見るような表情で盗み見している。

「……？」

昨日からどこがおかしい主人の一人娘に、エルレイドは不安の情を抱いていた。

どこか具合でも悪いのだろうか。いや、でも顔色が悪いわけでもない。だとしたら、何か悩みでもあるのだろうか。エルレイドは幼い少女の身を案じていた。

エルレイド “きもちポケモン”と呼ばれるラルトスとその進化形であるポケモンたちは、本能的に“守る”ことに特化したポケモンである。彼らは一生に必ず一人、“命を賭けてでも守る”と思える相手と巡り合うようになっていくのだ。

エルレイドの姉であるサーナイトにとって、その相手は今日の前にいる少女の父 オトナシ カズヒコという名の考古学者であった。その当時ラルトスだった姉曰く『逢った瞬間に分かった。この人が、私がお守りする人なのだ』らしい。

そのとき同じ場所に居合わせていた彼は、そう言われても全く理解できなかった。

自分は何も感じなかったからだ。オトナシ博士と出会った時には、何も感じなかった。

だが、そのおおよそ五年後、今から三年前に、彼は姉の言葉の意味をようやく理解することができた。

トイロと出会ったそのとき、彼は直感したのだ。『自分がお守りするはこの方なのだ』と。まさに、『運命の瞬間』であった。

あのときのことは今でも忘れてはいない。エルレイドとしてこの屋敷に来て、いの一番に出会った少女。その少女を見た瞬間、まるで時間が止まったかのように思えたのだ。

そして、なぜか当たり前のように、この少女を守るのだと頭で考えていた。そこに、理屈も理由も存在しなかった。ただ、守るのだという確信だけが存在していた。

だからこそ、エルレイドはトイロの身を何よりも案じているのだ。しかし、トイロの悩みの種が何なのかを知ることができないエルレイドは、それを取り除くにはどうしてやればいいかがまったく分からなかった。

分からないまま、少し気まずい雰囲気で、その日の朝食は終わった。

朝食を終え、エルレイドが食器を洗っているとき、トイロが外出する旨をエルレイドに伝えてきた。

「少しばかり町へと行ってくるよー。ルーくんはいつも通りに家事を続けていたまえー」

町へと降りるといふトイロの言葉に、エルレイドは耳を疑った。

トイロは、ワカバタウンでは浮いた存在である。町はずれの屋敷に一人で暮らし、たった一年で学校の終了単位を獲得した後は一切学校へも通わずに、父から時折送られてくる仕送りで傷ついた野生ポケモンの世話をしているトイロは、同年代の少年少女たちからはたった一人を除いて仲間外れに近い扱いを受けていた。

元より、聡明で本来は内向的な性格であるトイロも、そのたった一人である幼なじみのサトルを除いて同年代の少年少女たちと自分から関わろうとはしなかった。

彼らがトイロに歩み寄ることもなければ、トイロから彼らに歩み寄ることもない。トイロの『世界』は、今いるこの屋敷と時折通うポケモン研究所、そしてサトルの実家であるパン屋というとても狭いものであった。

エルレイドとしては、オトナシ家の跡を継ぐものとしても、また一人の人間としてもトイロにもっと広い『世界』を見てもらうことを望んでいたが、それはトイロが望まない限りはただの『強制』となってしまう。だから、敢えて口を出すことは一切しなかった。

そのトイロが、自分から『町へ降りる』と言ったのだ。いつものように、『サトルが来たから遊ぶ』とか、『ウツギ博士の研究を手伝いに行く』とかではなく、『町に行く』と言ったのだ。これは何かある。エルレイドはそう踏んだ。

「じゃあ、行ってくるよ」。夕方までには戻る。お昼はあっちで食べるから心配しなくていいのだよ」

やはり、何かある。トイロが一日中外出することなど滅多にない話だ。エルレイドは笑顔で見送るふりをしながら、大きなトートバッグを肩に提げたトイロがドアを閉めてからしばらくした後、悪いとは思いつつも気付かれないようにその後を着いていくことにした。

二月十四日、昼

トイロがまず向かったのは、屋敷と町までの間にある小さな雑木林だった。トイロは少しだけ開けた場所まで歩くと、そこにトートバッグを下して腰につけていたトレーナーズベルトのボールからマリルとリーフィアを出した。そして、ポケットから小さな笛のようなものを取り出し、それを吹く。小鳥のような音色が、雑木林に広がった。

しばらくして、トイロとマリルたちの周りにポケモンが集まって

きた。全員、以前トイロが介抱した野生ポケモンたちである。少し離れた場所からそれを見ていたエルレイドは小さく首を傾げた。今更、彼らに何の用事なのだろうか。

“ことりポケモン”のポツポヤオニスズメ、“みはりポケモン”のオタチなどが集まる中心のあたりに、トイロはトートバッグから取り出した包みを広げた。ポケモンたちから喜びの声が漏れている。何を渡したのかまでは、エルレイドがいる場所からは見ることをできなかったが、何か貰うと嬉しいもののようなのだ。

それを渡したトイロは、すぐに立ち上がるとポケモンたちに別れを告げるように手を振っていた。ポケモンたちも、それに答えるようにトイロに向けて鳴いている。トイロはそれに淡い微笑みを向けると、エルレイドのいる方へと歩み寄ってきた。

(まずい……！)

慌てて、苦手な“テレポート”で木の上へと隠れる。間一髪、エルレイドがテレポートで上へと飛んですぐに、トイロがエルレイドの真下を通過していた。ばれなかったことに胸を撫で下ろしつつ、エルレイドはトイロの尾行を続けることにした。

(ルーの奴……。やっぱり着いて来ているわね)

トイロの横を歩きながら、マリルは耳をそばだててほくそ笑んでいた。

エルレイドがトイロのことを屋敷からずっと付けていることを、マリルは最初から知っていた。エルレイドはばれないようにしているつもりなのだろうが、マリルの聴覚は欺けなかったようだ。マリ

ルの耳には、しっかりと自分たちをつける足音を拾っていた。

（ま。確かにトイロちゃんがあんな風にしてちゃ、心配はするでしょうね〜）

昨日の夜からのトイロの様子を思い出し、マリルはにししと悪戯っぽく笑っていた。この二人を見ていると飽きない。エルレイドはトイロを何よりも大切に思っているのです、時にはその行動が過保護なように見えることがある。いや、実際に相当過保護なのかもしれない。

時々、マリルはそんなエルレイドを見かねて注意することもあったりするのである。

（でも、今回は絶対に教えてあげないんだけどね〜）

しかし、今日は敢えて味方をしないことにした。もちろん、そちらの方が面白いからである。今日この日のイベントは、女の子にとっては特別なのだ。こんな楽しいこと、鈍感なアイツに教えてたまえるか。

（くふふふふ。せいぜい情けなく足掻いていなさい、ルー）

（……まあねえ、なんだか怖い……）

楽しそうに、そして不気味なくらいに恐ろしい微笑みを浮かべたマリルを、リーフィアが小さく震えながら見つめていた。

結局、つけた結果はいつも通りだった。

ウツギ博士の研究所にしばらく滞在し、それから商店街にあるサトルの実家 『パンのヤマシロ』でサトルの両親と会話を交わし、パンを購入してそれを公園でマリルたちと食する。それからしばらく

く町の商店街の雑貨屋で品を物色したりしただけだ。

少し気になることがあるとすれば、訪問した先でトイロが何か包みのようなものを人々に渡していたということ。ウツギ博士やサトルの両親に、何か小さな包みを渡していた。それを受け取った彼らが、とてもうれしそうな顔をしていたことが、記憶に残っている。

夕方になる少し前に、トイロたちは帰路についていた。エルレイドはトイロたちに後をつけていたことがばれないように、というか、マリルには既にばれているのだが “テレポート” を用いて屋敷に戻って夕食の準備をしていた。

「ただいま〜」

「るりる〜」

「フイ〜」

トイロたちが帰ってきた。エルレイドはいつも通りに振舞おうと、カレーを煮込んでいた手を休め、玄関に向かおうとした。ところが、

「ルーくん」

トイロの方が、先にキッチンに入って来ていた。その様子は、相変わらずそわそわしており、更には背中に何かを隠すようにして両手を背中に回している。

「……………」

エルレイドがトイロの様子に困惑していると、

「あのっ、あのね、これ！」

トイロが、何やらピンク色の紙の包みを差し出してきた。可愛らしい黄色のリボンで飾りつけされたその包みに、エルレイドは少しビククリした。

（これは……………、私に？）

エルレイドがその場でフリーズしていると、トイロがもじもじしながらもう一度エルレイドに包みを差し出してくる。

「ルーくん。今日ね……、バレンタイン、なんだよ……」

(バレン、タイン……?)

聞きなれない言葉だった。エルレイドが意味を理解しかねていると、トイロがさらに言葉を続けた。

「バレンタインってね、大切な人にお菓子とか贈り物を送る日なんだ。だから、ルーくん……」

(あ……)

その言葉で、昨日からのトイロの行動すべてに合点が行った。

つまり、トイロはその『贈り物』を作っていたのだ。そして、その送る相手の中に、自分が含まれていた。

だから、昨日はキッチンに入れてくれなかったのか。

だから、昨日からやたらと調理器具に目を配り、自分の作りたいものが作れるのか確かめていたのか。

今日も、そわそわしていたのはそのせいか。

ポケモンや、博士たちに包みを渡していたのはそのためなのか。

エルレイドは、静かに包みを受け取った。ほのかに香る、甘い匂い。

包みを受け取ったエルレイドに、トイロが淡く微笑みかけてきた。

「いつもありがとうね、ルーくん」

『十色のキセキ』バレンタインスペシャル 了

ACT・2 バレンタインスペシャル（後書き）

はい。バレンタインスペシャル。主人公はルーくんことオトナシ博士のエルレイドでした。

もう少しエルレイドとトイロの関係をピックアップして書くかどうか迷ったんですけど、番外編なのでちょっとあやふやで終わらせることにしました。

いつか本編に再登場したときにもっと詳しく書くことと考えています。

では、またいつか!!

ACT・3 雛祭スペシャルの告知

おまえら！ ニューヨークに行きたいかー！

トイロ「うーるーさーいー！ とつても耳障りなのだ」

シレン「いきなり高校生クイズのノリ……というか、パクリは止めてください！」

あ、ごめんごめん。一回やってみたかったのよね、これ。

トイロ「で、一体何なのかね？ キャラクター解説もほったらかして」

最新話は更新しました！。

で、キミたち女の子なのに今度のお祭りのことを忘れていない？

トイロ「お祭り？ 何のことかね？」

桃の節句だよ、桃の節句。

せっかくアナザー版やってるんだし、こりゃやんなきゃさ

シレン「わあ、すてき！ ジャパニーズ・カルチャーにまた触れ合えるのね！」

そこで、

『十色のキセキ』雛祭スペシャルと題しまして、読者の皆様方とパ
ーティーをやりたいなーと考えております！！（どーん）

ト・シ「……………え？」

だから！

以前私たちが招待を受けたように、今度はここで

トイロ「え、ちょ、今更かね！？」

シレン「通知するの遅すぎないですか！？ 桃の節句って明後日ですよ！？」

んにゃ！ 私の実家は四月三日が桃の節句だったのよ！だから問題ない！

トイロ「一般的な桃の節句は明後日だよ。ローカルギャップを今ここで出さないでくれたまえー」

シレン「日本の行事って、結構地方による違い多いわね……………」

お雑煮の具の違いだったり、もちの形だったり、はたまた七夕も違ったりするからね。

そこら辺は寛容に行きましょうよ

トイロ「……………ではないであろうー。いつやるのかね？」

三月三日はからすはちょっと忙しいのよ。だから、え〜と……………三月十一日を予定しています。

トイロ「どちらにしる急ではないか…！」

シレン「というより時期過ぎてますよ！」

ええい！ 私の実家は桃の節句が四月だと言ったろうに！
むしろこの方が間を取った良い時期なんじゃー！

ト・シ（む、むちゃくちゃだ……）

では、開催内容の告知です （無視）

開催日：三月十一日

場所：オトナシ家 別名『放蕩娘のポケモン屋敷』

参加希望の作者様は、参加するキャラクターを明記の上、メッセージを旅がらすに送ってください。

参加するのは人間さん、ポケモンさんのどちらでもオッケーです
あと、参加人数はこちらの都合（というか、メインキャラの少なさがあるの）で四名までとさせていただきます。

もちろん、これは上限ですので二名でも三名でも全然構いません。

トイロ「他には何かしないのかね？」 ただパーティーをやるだけではつまらないであろう？」

うん。そこで、企画も考えてあるよ。

シレン「どんなのですか？」

名づけて『フィーリングカップル雛祭編』！

『十色のキセキ』のキャラクターや他作者様のキャラクターでお内裏様とお雛様のペアを募集。

発表とお披露目をやりたいと考えています。

これは、『十色のキセキ』のキャラクターのみ（ポケモン含む）で考えていただいても構いませんし、

『シレンはオレの嫁』的な組み合わせでもオツケーです。他作者様のキャラクターとの組み合わせも大歓迎。

もちろん、人間同士やポケモン同士のみならず、混合カップルもオツケーです。

ただ、すみませんが『十色のキセキ』アナザー版ですので、どちらか片方は『十色のキセキ』のキャラクターでお願いしますw

トイロ「ちなみに、お披露目された組み合わせで人気投票も行うよ
うだよ」

はい。ただお披露目しただけではつまらないので、一番良い組み合わせを読者の皆様に決めていただくと思います。その発表は後日のアナザー版で発表予定です。

人気投票の詳しい旨は、また当日発表すると言うことでw

シレン「えつと、ちなみにこちらの組み合わせはお一人様五組までとさせていただきます。皆さんの考えたカップルをぜひ教えてくださいねw」

パーティー参加はなくても組み合わせのみ考えましたーと言う方もどしどしメッセージをお送りください。

誰がどんな組み合わせを投稿してきたのかも放送予定ですので、ユーザーネームを公開されるのがちょっと……な方は、ラジオネーム（もしくは提案してきたキャラ）も明記してくださいw

締め切りは両方とも三月九日とします。

サトル「お内裏様とお雛様だ！　んなもんオレとトイロの組み合

わすれまじいおあつ」(蹴り

トイロ「引っ込めこのドスケベ」

……え、なんか一名いきなり乱入してきて即刻吹き飛びましたが、
今回のアナザー版はここまで！

皆さんのご参加、お待ちしております！！

トイロ「ところで作者」

ん？

トイロ「参加者が現れなかったらどうするのかねー？」

不吉なこと言っなあああああ！！

ACT・3 雑祭スペシャルの告知（後書き）

たくさんのご参加&フィードバックカップル、お待ちしております。

「トイロ」なのだ〜」

ACT・4 1/2 ひなまつりスペシャル〜お出迎え編〜(前書き)

何とか形になりました！

招待している人数少ないですが、とりあえず第一部です！
それでは、どぞ！

ACT・4 1/2 ひなまつりスペシャル〜お出迎え編〜

オトナシ家、通称『放蕩娘のポケモン屋敷』庭。

ルー『さて、こんなもので良いかな？』

お、準備ばっちしだね。ルーくん

ルー『今日はお客さまもいらっしやるからな。腕によりをかけて作った』

トイロ「わー！ 美味しそうだね〜！ さすがはルーくんなのだ〜」

シレン「本当！ 彩りも綺麗で食べるのもったいないわ。これがひな祭りのお料理なのね〜」

ダークライ『モモンの実の匂いが良いな……。食欲をそそる』

サトル「お前が言つとほんとギャップあるなあ……………」

マサムネ「からす殿。お皿や箸などはこの辺りで良いでござるか？」

うん。今日は立食パーティーだからね〜。取りやすい位置にあればオツケーよ。

マサムネ「承知したでござるよ」

(皿やら箸やらをセッティングしていく)

トイロ「む。そろそろ時間ではないかね？」

お、そだね。じゃあ、トイロとサトルでお出迎えに行きましょう！

トイロ「了解なのだ」

サトル「ほんじゃま、行きますか」

屋敷 門の前にて

トイロ「ところでからす。今日は何人お客様が来るのかね？」

六人。二組だよ。

サトル「お、意外と集まったんじゃね？」

というか、自分であそこまで大々的に言っておきながら集まらなかったらどーしよー！とか思ってたから、本当に参加してくださった作者さまには感謝感謝ですよ。

トイロ「これからはもっと日ごろの行いを良くしていかないとだめだよ」

が、頑張ります……（滝汗）

ブレイズ「おいショウ、早くしろって！ オレもう腹減っちゃった

よ〜!」

シヨウ「ブレイズ、もう少し落ち着いてください。料理は逃げないから大丈夫ですよ」

お、早速来ましたね〜。

ブレイズ「よお! 遊びに来たぜ!」

シヨウ「今回はお招きいただき、ありがとうございます」(お辞儀)

サトル「シヨウとブレイズか! こういう形でははじめましてだな」

赤神 零先生の『ポケットモンスターX ｳDestiny』の主人公、シヨウさんとヒコザルのブレイズくんですね。こちらこそお待ちしておりました〜w

サトル「おいシヨウ! バトルやろうぜ!」

シヨウ「ええ? ここでですか?」

サトル「当たり前だろ! ブレイズはいいよな?」

ブレイズ「ん〜。腹は減ったけど、ま、バトルの二つや二つ、朝飯前だからな! いいぜ、サトル!」

サトル「決まりだな! ぶちかますぜ、ガーディ!」(ボールからガーディを出す)

ブレイズ「おっしゃあ! やってやるぜ!」

シヨウ「……しょうがないですね。受けてたします」（小さくため息）

おい、まじでやるんですかい！？（汗）

トイロ「多分、もう聞いてないよ〜」

サトル「ガーディ、“かえんぐるま”！」

シヨウ「こっちも“かえんぐるま”です！」

ブレイズ「うおおおお！」

ガーディ「ガウウツ！」

（ぶつかり合う二つの“かえんぐるま”）

ブレイズ「こいつっ……！ なかなかやるじゃねえかよ！」

サトル「ガーディ、そのまま“かみつく”だ！」

シヨウ「それならこちらは“みだれひっかき”です！」

……ああ。すっかり白熱しちゃって……。仕方ない、トイロ。もう一組いらっしやるから、私たちでお迎えしよう。

トイロ「そっしよっかね〜」

門より少し離れた場所にて

ピカチュウ「んぐ。ねえ、場所ってここで本当に合ってるのかしら？」

ナエトル「多分大丈夫だと思うよ、ピカチュウ。ほら、えっと……町の外れにある小高い丘の上に建てられた洋館って、あそこのことだと思うし」

ミライ「やっと着いたね。美味しいものいっぱいあると良いね、キモリ」

キモリ「むしろ俺としては、突っ込み役がちゃんといえるのか不安ではないんだが」

おっ、もう一組も来たk（突然風が吹く）

トイロ「キモリーーーーー！！ ナエトルーーーーー！！」（
猛ダツシュ）

ナエトル「わわっ！ と、トイロちゃん!?」（驚）

キモリ「今の……人間が出すスピードなのか?」（汗）

トイロ「うわー！ 二匹とも来てくれたのだねー！ すっごく嬉しいよー〜!」

ピカチュウ「って、私たちもいるんだけど……」(汗)

ミライ「あはは。トイロったらキモリとナエトルしか見えてないんだね」(笑)

こらトイロ！いきなり走るな耳がキーンとしたわあ！！(怒)

……どーもお騒がせしました。春野ツバサ先生の『ポケモン不思議のダンジョン』シリーズよりお越しのピカチュウにナエトル、それにミライとキモリですね。お待ちしておりますた〜w

キモリ「おいトイロ。料理の中には甘味物もちゃんと揃っているんだろうな？」

トイロ「もちろんだよ〜。ルーくんがモモンの実でたくさんデザートを作ってくれたのだ〜」

キモリ「そうか」(頷き)

ナエトル「キモリって本当に甘いもの好きなんだね……」(苦笑)

ピカチュウ「ひな祭りにちなんだお料理とデザートね〜。私も楽しみだわw」

ミライ「それじゃあレッツゴー」

いえっさ〜

って、そっぴやあの二人はまだバトルしてるのかしら……？

門の前にて

ルー『……言いたいことはあるか、サトル』

サトル「……あ、ありませんですハイ」（滝汗）

あれ？ 何でルーくんがサトルの首元に刃なんぞ……？

ブレイズ「や、やっと戻ってきたなからす！ あのエルレイドちゃん怖かったんだぞ！」

トイロ「む。ブレイズくん。ルーくんはどうして怒っているのだね？」

シヨウ「それが、ブレイズとサトルさんのガーディが放った“かえんほうしゃ”がパーティー会場のすぐそばまで広がってしまった……」

ブレイズ「会場はマサムネとダークライが守ってくれたから良かったんだけどよ……。エルレイドの奴がすげえ形相でこっちに走ってきたんだよ！」

あー。なるほろね……。

ピカチュウ「それで怒られてるってこと？」

シヨウ「はい……」（ちらりとサトルたちを見やる）

ルー『……貴様、あそこには女性もいたのだぞ？ お嬢様の王子とかのたまっておきながら、そんな簡単な気遣いもできないとは……』
(ガミガミ)

サトル「……すみません」(しゅん)

トイロ「あはは。サトルったら完全に縮こまってしまっているね」
(笑)

ナエトル「ええ！？ 笑ってすませちゃうのお！？」(汗)

ミライ「それがトイロとサトルの関係なんだし、それでいいんじゃない？」

ブレイズ「悪いとは思うが……哀れだな」

………(汗)

と、とにかく！ お客様はお出迎えしたし、ひな祭りスペシャル！
いざスタートなのです！

全員「おうっ！」

その2に続く！！

全員「何っ！？」

ACT・4 1/2 ひなまつりスペシャル〜お出迎え編〜（後書き）

第一部はこれにて終了ですw

次は『ひなまつりフィーリングカップル』の発表です！

推敲が終了次第、投稿します。

ACT・4 2/2 ひなまつりスペシャル〜パーティー編〜(前書き)

お待たせしました！

ひなまつりスペシャル、後編です！

それでは、どうぞ！

ACT・4 2/2 ひなまつりスペシャル〜パーティー編〜

さてと……。では、改めまして、これよりひなまつりパーティーを開催いたします。

うちのルーくんが腕によりをかけて拵えた料理の数々をごゆるりと堪能していただきたいと思います！

では、かんぱーい！

全員「かんぱーい！」

(立食パーティー開始！)

ブレイズ「うめえええ！ このちらしずし、すっげーうまいぞ、シヨウ！」

シヨウ「ブレイズ。少しはしたくないですよ……でも、このちらしずし、確かに美味しいですね……。ほんのりと梅の風味が効いていてもっと食べたくなります」

ブレイズ「だだだ！ よおっし、おかわりだ！」

サトル「おおっと！ オレの分もちゃんと残してくれよな！」

ブレイズ「お、じゃあ今度は大食い勝負なんかどうだ？ サトル！」

サトル「おう。受けて立つぜブレイズ！」

シヨウ「……もう好きにしてください」(呆れ)

マサムネ「ミライ殿、ピカチュウ殿。菜の花のお吸い物などいかがでござるか？」（お吸い物の乗ったお盆を手に歩いている）

ピカチュウ「あ、じゃあ貰おうかしら」

ミライ「私も私も……。……。あ、あっさりしてて美味しいw」

ピカチュウ「生姜を梅の形に切って浮かべてあるわ……。これもルーくんがやったの？」

ルー「はい。季節感も味わっていただきたく、柚子の皮で香りづけもしてあるんですよ」

ミライ「はああ。こだわってるわね」

シレン「これが『ジャパニーズ・スープ』の味付けなんだねw 薄味で素材のうまみを引き出しているんだわ」

マサムネ「他にもはまぐりなど別の種類もあるでござるよ」

ピカチュウ「ていうかマサムネ。完全にウエイター化しちゃってるわね……。」（苦笑）

ナエトル「うわあ！ このお餅、面白い形をしてるねえ。それに赤と白と緑の三色ってすごくきれいだなあw」

トイロ「それはねナエトル。菱餅と言っただよ」

ナエトル「ひしもち？」

トイロ「うんw それぞれのお餅の色にはちゃんと意味が込められているのだよー。赤は先祖を尊び厄除けと健康を祝い、白は清浄と残雪、緑は春先に芽吹く新芽と萌える若草を喩えているのだよー。菱形なのは、いろんな説があるけど一般的なのは長寿を祈るということかなー」

ナエトル「へええ〜。トイロちゃんって物知りだねえ」

ブレイズ「へへっ！ なかなかいける口じゃねえか、サトル！」
(後ろには皿の山)

サトル「おまえもな、ブレイズ！」(こちらもかなりの皿の山)

マサムネ「……この二人の胃袋はどうなっているのござるか？」

(汗)

キモリ「モモンのコンポートにシャーベット、タルトにパイ……」

(何から行こうか決めかねている)

ダークライ「モモンとヨーグルトのスープにモモンのムース……。

ワイン煮も捨てがたいな……」(同上)

キモリ「ん？」

ダークライ「……君も、悩んでいるのか？」

キモリ「ああ。こつもたくさんあると、やっぱり最初にどれから行こうか悩むもんなんだな」

ダークライ「最初の一口。やはり思い出深いものにしたいたからな」

キモリ「それには賛同する。誰かお勧めとか無いのかよ……」

あ、それならお二人さん。これとかどうですか？（あるお菓子を差し出す）

キモリ「……って、おいからず。これはただのモモンの実じゃないか！」

ダークライ「確かに。だが、何故こうもしつかりとスイーツがある中、これだけ実のままなんだ？」

シヨウ「あ、それってねりきりですか？ 僕にもくださいw」

お、分かる子はすぐに分かったね。はい、どうぞw

キモリ「ねりきり？ 何だそれ？」

シレン「ジャパニーズ・スイーツ 和菓子の一つよ。白餡ときゅうひ、それに白玉粉を混ぜて丸めたお菓子なのw」

キモリ「なっ！ これは餡子なのか！」（驚）

ダークライ「ふむ。ここまで本物のようだと最早芸術並みだな……」

ルー『芸術などと……。手先が器用なだけですよ』（照）

ナエトル「でも美味しいよこれ！ あ、そうだ。ピカチュウにも教えてあげなきゃ！」

キモリ「(ぱくっ)……うん。確かに美味しいな。……おいトイロ」

トイロ「ん〜? どうしたのかね、キモリ〜」

キモリ「美味しい菓子を用意してくれた礼だ。尻尾くらいは触らせてやる」

トイロ「本当!? やったー!(すぐさま飛びつく)……ハグはダメなのかね〜?」

キモリ「それはd」

ミライ「ダメだよトイロ〜。キモリをハグできるのは私だけなんだからー」(といつつハグ)

キモリ「お前でもダメだったの!(怒) っていうか放せ! ねりきりが食えん!」(じたばた)

トイロ「尻尾〜」(ふにふに)

キモリ「トイロも今はよせ! あっ! お、落ちる!」(あたふたじたばた)

ブレイズ「……あれは止めなくていいのか? サトル」

サトル「……なんか空しくなる気がするからよすわ」

……。え〜。皆様गत、お料理を堪能されているところ失礼します。
そろそろ今回のメインイベントを開始したいと思います!!

ピカチュウ「メインイベントって？ お料理じゃないの？」

(ずるっ！)

あ、いや、それもそうですけど……。

『ひなまつりフィーリングカップル』のことですよ(泣)

ミライ「あー。そんな企画あったわね」

はい。あったのですw

今回はお二人の先生からカップルの応募を頂きましたw
で、それをこれより発表します！

全員「わー！」(拍手)

えっと、ちなみに発表の順番は旅がらすが勝手に独断で決めましたw
なので先生方が提案したまんまの順番ではありませんのでそこら辺
はご承知おきくださいw

では、まずはエントリーNo.1!

その絆の元は大切に思うパートナーへの想い！ でも実際は素直な
あの子をお姉ちゃんが仕切っているのさそうなのさ!

お内裏様はリーフィアのアーくん！ お雛様はマリルのまあちゃん
です!

アーくん「フィ〜」(烏帽子を乗せて登場)

マリル「るりり〜」（お雛様コスプレで登場）

ブイのすけ『ここはブイのすけ様が解説をするぜい！ マリルとりーファイア、共にトイロちゃんの最初の手持ちだな！』

……君をここで出すのは若干躊躇われるが、まあ他に解説役がいないから仕方ないか。

はい。この二匹はトイロのパーティー内では特に絆が強いですね〜。

ブイのすけ『トイロちゃんの小さい頃を知っているっていう共通点がそれを強くしているのかもな！』

この二匹もこれから活躍できると良いですね〜。

では、一組目はこれで終了w

続いてエントリーNo.2！

絆と言えばこの二人！ 孤独な彼を救ったのは、彼女の笑顔だった！ ポケモンと人の壁を超えたある意味名カップル！？

お内裏様はダークライ！ お雛様はシレン！

ダークライ「……緊張、するな……」（照）

シレン「ダークライ、結構似合ってるわよw」

ダークライ「いや、シレンこそ、その……」（照）

……ダークライ、お前どんだけ奥手なの？

ブイのすけ『……とりあえず、ダークライは引っ込め』(舌打ち)

全員「ええっ!?!」(汗)

ちよ、ブイのすけさん!?! アンタ何言ってるんですか!?!

ブイのすけ『シレンのダイナマイトボディはこのブイのすけ様のも
んじゃー!』

シレン「ちよっと、ブイのすけ!?!」(真っ赤)

ダークライ「……ブイのすけ。貴様、オロシてくれる!?!」(シャ
ドーボールの構え)

んな、今から乱闘は止めー!

もう、せっかくいい雰囲気だったのに……(泣)

……気を取り直してエントリーNo.3!

ちよっと意外な組み合わせ? ここで異文化交流か!?

うん実はフラグ立ててたの気づかれた方いますよねバッチシ狙って
たんですけどー!(何)

お内裏様はマサムネ! お雛様はシレン!

シレン「マサムネくん、大丈夫?」

マサムネ「……ちよっと緊張するでござ」

ブイのすけ『出てくんなエセ忍者!』(みずのはどろ)

マサムネ「ぐほっ」(舞台裏に吹き飛ばされる)

うおおい！ もう少し平等な解説やってよ！

ブイのすけ『あのガキにはシレンのダイナマイトボディはまだ早いんじゃない！』

お前さつきからそればっかだな！(汗)

……みなさん、本当にすみません。

じゃあ、仕切り直しです。

折り返し地点だよエントリーNO.4！

やっぱりこの二人が基本かな？ 阿吽の呼吸で今日も行く！……でも結局は殴られ損？

お内裏様はサトル！ お雛様はトイロ！

(舞台裏にて)

サトル「トイロ！ 愛でさせる！ つっつか脱がさせる！」

トイロ「ぎゃー！ 近寄るな！ ボクの半径五メートル以内に入るな！ 寄るな！ 来るなーーーーー！！」

(ドタドタバタバタ……)

ナエトル「さ、サトルくん、積極的にも程があるんじゃない」(汗)

ピカチュウ「トイロのキャラもちょっと崩壊しているわね……」

ブイのすけ『……………』(汗)

……………あー、解説はいつか？

ブイのすけ『見てっつーか、聞いて理解してくれってアレだな』

……………さっきからまともに進んでないんですけど……………。

さてさてそれではエントリーNo.5！

最近出てない彼ですが、トイロに与えたジャブはでかい！？

さてさてサトルはどう出るか！？ そろそろ本気で頑張れよ！

お内裏様はアリア！ お雛様はトイロ！

アリア「トイロ……………。大丈夫？」(なでなで)

トイロ「ふええ〜ん。サトルが、あのエロガキが……………！」(ボロ泣き)

キモリ「お、おい。トイロがかなり泣いてるぞ」(汗)

ミライ「よっぽどサトルのあれが怖かったんだろっね〜」(苦笑)

ブイのすけ『アリアの兄ちゃんの補足説明だな。』P.4 花咲く町で』に出てきて、その後、『P.6 強くなるために』でトイロちゃんとバトルした、グレイシアを連れた兄ちゃんだぜ』

かなり前に出てきたキャラ故に、まさかエントリーされると思わなかった旅がらすです。

アリア「作者……。それはちょっとひどいんじゃない？」

いや、お前そしたらエントリーされていないキャラだってばっちりいるんだからね？ それに比べたらずっと待遇良いんだよ？

アリア「そうだけど……」

……えっと、次行きましょう。

エントリーNo.6！

その刃はただ大事な人を守るため！ この命、貴女に全て捧げます！

お内裏様はエルレイドのルーくん！ お雛様はトイロ！

ルー「わ、私などがこのような場に出てよろしいのでしょうか……？」

トイロ「大丈夫だよルーくん。どーんと構えたまえ」

ブイのすけ「お、ようやくトイロちゃんがいつもの調子を取り戻したな。実はこの組み合わせ。これだけが唯一ダブった組み合わせなんだぜ！」

バレンタインスペシャルがその要因のようでしたね。

単純に行くと、この組み合わせがベストカップルってことになるのでしょうか？

サトル「んぬわぁにいい！ オレとトイロこそがベストカップルだろうが！」

……あの後でお前よくそれが堂々と言えるよな……（汗）

さてさて、残すところはあと二つ！ 遂にラストスパートですよエントリーNo.7！

その身に秘めるはメロメロボディ！ もうこの際パーティー全員メスでも良いんじゃない？

お内裏様はサトル！ お雛様はウパー＆チコリータ＆ミニリユウ！

サトル「もつかいちよつと待てえ！ この組み合わせは異議ありだ！ 何故お雛様が複数！？」

面白いからだ！（どーん）

サトル「理不尽だー！ー！！」

ブレイズ「……哀れだな、もう、ホントにマジで」（苦笑）

ショウ「ウパーたちは大喜びみたいですけどね」

ウパー「ウパ。ウパー！」

チコリータ「チコ！ チッコー！」

ミニリユウ「リユウ！ リユウ！」

おや？ 何やらもめていらっしやる様子で？

ナエトル「あれ？ 三匹ともどうしたの？」

ピカチュウ「ねえ、シヨウ。彼女たちは何て言っているのかしら？」

シヨウ「えーと、単刀直入に言えば、『誰がサトルのお雛様に一番ふさわしいか』を競っているみたいですね……」

サトル「んなもん競うな！」

キモリ「……なんか、争いがさらにヒートアップしてるぞ」(汗)

ブレイズ「シヨウ。これが所謂『修羅場』って奴なのか？」

シヨウ「僕に訊かないでください……」(汗)

ミライ「あれ？　そういえば、エントリーがもう一つあるって言ってなかった？」

………うん。言いました。

でも、コレ言っているのかしら？

トイロ「何か問題でもあるのかね？」

問題っつーか、ん……。

シレン「言った方がすっきりするなら言ったら良いんじゃないですか？」

………じゃあ、言うよ？

お内裏様・サトル、お雛様………ミニリユウ！

ミニリュウ「リュー！」（歓喜）

チ・ウ「……………（がーん）」

Intervailの影響かな？ ミニリュウからほっぺにチューしてたしねw

チコリータ「ち〜こ〜……………」（ズゴゴゴゴゴゴゴゴ

ウパー「ウパ〜……………」（ズゴゴゴゴゴゴゴゴ

サトル「…………あの、なんかデジャブるんですけど」（汗）

ブイのすけ『あー…………。直訳しよう。』…………この浮気者めがー！
ー！…………』

チコリータ「チッコ！」（はっぱカッター）

ウパー「ウパー！」（マッドショット）

ちよ、まで、ぎゃああああ！（はっぱカッターがすれすれを飛んでいく）

ナエトル「ぴ、ピカチュウ！ 逃げよう！」

ピカチュウ「待って！ その前に残ってる料理を……………」（どこからかタツパーを取り出す）

ベチャツ「“マッドショット”が料理にかぶる（

ピ・ミ「あ……」

キモリ「す、スイーツが!!」(愕然)

ナエトル「び、ピカチュウ……? それにミライまで……」(ガタガタブルブル)

ピ・ミ「……サトル! 貴様なにしてくれとるんじゃああ!!」(放電&銀の針)

サトル「ちょ、何でオレ!? ってのわああ!!」

ブレイズ「おいコラ馬鹿サトル! こっち来るんじゃねええ! “かえんほつしゃ”!」

シヨウ「僕たちにまでとばっちりはやめてください!」

トイロ「きゃー。ルーくんアリア助けてー! なのだ」(楽しげ)

アリア「どうして楽しげなの、トイロ……」(苦笑)

ルー「お嬢様……」(嘆き)

ダークライ「逃げるぞ、シレン!」

シレン「あ、う、うん!」

ブイのすけ「こらー! ブイのすけ様を置いていくなああ!!」

キモリ「サトル! 貴様は万死に値する! “エナジーボール”!」

ひなまつりスペシャル・完

ACT・4 2/2 ひなまつりスペシャル！〜パーティー編〜（後書き）

すみません。

どう收拾つけようか迷った挙句、一番はっちゃけやすい乱闘騒ぎで終わらせてしまいました（爆）

改めて、今回参加してくださった春野ツバサ先生と赤神 零先生にこの場を借りてお礼を申し上げます。

今回のキャラクターたちの動向についてご意見がありましたらメッセージ・感想欄のどちらでも良いので教えてください。

修正すべき点がありましたら、速攻で修正します！

読者のみなさまも本日はお付き合いくださり、誠にありがとうございました。

次回は本編で会いましょう！

ではでは！！

ACT・5 告知！！

BGM♪君の胸にLaLaLa♪

トイロ「みんな、元気かね〜？ お久しぶりなのだ〜」

シレン「お久しぶりです。なんと、半年振りに『十色のキセキ』アナザー版『十色のラジオ放送局』が更新されました〜！」

トイロ「まったく、今の今まで馬鹿作者は何をやっていたというのかね〜」

シレン「まあまあ、とりあえず更新されたのは良いことのはずなんだから、ね？」

トイロ「ま、こんな会話で時間を潰すのも良くないし、早速本題と行こうではないか〜」

シレン「そうね え〜と、ここで突然ですが、実は、来る10月31日、『十色のキセキ』は一周年を迎えま〜す！！」（拍手）

トイロ「進行速度に突っ込みどころ満載ではあるが、一年間執筆を続けることができたのは読者の皆様のおかげなのだ〜。礼を言うよ〜」

シレン「え〜とそこで、せっかく良い節目なので何かやろうということになったのですが、『十色のキセキ』はキャラクター投票を行うおうにもキャラクターが少ないので、アンケートをとることになりました！」

トイロ「別の作品からのパクリなのだ」

シレン「こらトイロ。思っただけでも言っちゃダメよ！……え〜と、作者曰く、せつかなので読者の皆様がこの作品をどんな風に読んでいるのか知りたいのだそうです」

トイロ「アンケートは今日から10月20日までとさせてもらおうよ。アンケートに答える場合は、この感想欄に書き込むか、からす宛にメッセージに送るかどちらかでよろしく頼むのだ」

シレン「質問は複数あるので、好きなものだけの回答でもオッケーです。では、質問へと参りましょう！」

質問1

『十色のキセキ』で一番好きなエピソードはどれですか？

トイロ「ん〜。まだコガネ編までしか終わっていないが、果たしてどのストーリーが読者様のお気に召しているのだろうか？」

質問2

『十色のキセキ』で一番好きな台詞は何ですか？

シレン「これは意外と、マサムネくんの奇声が……」

トイロ「ていうか、この小説奇声を発するキャラクターが多くはないかね？」

質問3

『十色のキセキ』は色をテーマにした物語ですが、トイロ・サト

ル・シレン・マサムネのメインキャラクター四人のイメージカラーはどんな色を想像しますか？

トイロ「サトルの色とかちよつと気になるのだ〜。これには理由もつけてもらえるとしても嬉しいよ〜」

質問 4

トイロたちにいろんな服を着させられるとしたらどんな服を着て欲しいですか？（ポケモンも含む）

シレン「作者さん、ファッションに詳しくない割に、この小説書くときには一生懸命ファッション雑誌を読むのよね〜」

トイロ「これは所謂コスチュームプレイというヤツも含まれるね〜。でも、マサムネは最初からコスプレしているようにも思えるが……」

質問 5

もし、トイロたちの手持ちの中から一匹パートナーとして旅をするとしたら、どの子がいいですか？

トイロ「ん〜。結果が見えているのはボクだけだろうか？ それとも意外なダークホースが登場したりするのかな〜？」

質問 6

もし、『十色のキセキ』のキャラクター（人間）と旅をするとしたら誰と旅をしたいですか？

シレン「これはメイン以外のキャラクターも大歓迎ですw」といつても、この小説のダークサイドは未だに正体不明が何人かいますけど……」（汗）

質問7

ちよつと趣向を変えまして、さて、あなたは『十色のキセキ』のキャラクターと中身が入れ替わってしまいました。さて、それは一体誰でしたか？

トイロ「これも人間ポケモン問わず。だよ。このキャラになってあんなことをしてみたい！ という意見をお待ちしているのだ」

質問8

お好きなように誰にでも何でも聞いてください（ネタバレは含まず）

トイロ「シレンのスリーサイズとか、サトルの弱点とかそういうものをどしどし聞いてくれたまえ」

シレン「ちよつとトイロ！ ……え、えつと、一応これで質問は全部です。たくさんのお待ちしておりますw」

トイロ「みんなの回答、心待ちにしているよ。じゃあね」

アンケート、よろしくお願いします！！

トイロ「アンケートの答えが来なかったら、この部分は消去するの
かね？」

不吉なことを言っなああああ！！（滝汗）

ACT・6 1/3 一周年記念すべしやる!!

ポケモン、ゲットだぜ!

BGM♪めざせポケモンマスター♪

トリックオアトリート!

ハッピーハロウィンお菓子をくれなきゃいたずらしちゃうぞ (か
ぼちあの被り物つき

トイロ

「トリックオアトリートなのだ」 (バンパイアの仮装

シレン

「お、お菓子くれなきゃいたずらしちゃうんだから!」 (魔女っ子
仮装

女子三人組

「お菓子! お菓子!」

・

・

・

サトル

「……って、ちょっと待ったー! いきなり無印最初のOP流した
と思っただらその台詞って一体どういうコンセプトで動いてんだよ!

「ってか、ハロウィンは昨日だ!!」

いや、だってさ、日本とは時差のある国　フィオレとかオーレとかイツシュだったら今日は10月31日。ハロウィンですよ？　だったら最初の挨拶はコレで決まりでしょう！

トイロ

「それについてはからすに賛成なのだ。さあサトル！　お菓子を渡したまえ」

サトル

「……んなモン持ってねえし」(ペしっ

マサムネ

「うにゃあああ！　し、しししシレン殿！　そんな肌を出したらダメでござる！　はやく何か羽織ってくださいね!!」

シレン

「ええ、そうかなあ？　結構可愛いと思うんだけど」(ミニスカの衣装を摘みながら

サトル

「……可愛いがかなりエロスを含んでいる気がするな」(ボン

んじゃあ、とりあえずハロウィンネタはここまでにして、本題に入りましょうか

トイロ

「そうしようか。実は、今日というか日本では昨日だが、でボクたちの物語『十色のキセキ』が一周年を迎えたのだよ」

サトル

「物語がちつとも前進していないことについては突っ込みどころ満載だが、ここまで続いたのは今まで読んでくれた、んでもって読み続けてくれている読者様のおかげってことだな！」

シレン

「まだまだ序盤の物語ですが、これからも頑張っていけますのでよろしく願いますね」

マサムネ

「某たちもこれからもっともっと強くなっていくでござる。応援よろしくお願い申し上げます」

今回の『十色のラジオ放送局』はそんな一周年を祝して先日募集したアンケートの結果発表を行いたいと思いまゝす

トイロ

「ま、作者の人望は知れたところだが、君にしては集まった方ではないのかね」

だまね。

えゝ、冗談抜きで、参加してくださった読者の皆様。本当にありがとうございます！

シレン

「アンケートの結果は、回答をそのまま引用させていただきました。もちろん、個人を特定するような場所は伏せて発表しますのでご安心ください」

マサムネ

「それと、今更でござるが、今回の放送はメインキャラクターである某たち四人と作者の旅がらす、総勢五名でお送りするでござるよ」

サトル

「んじゃ、早速アンケートの結果発表と行くぜ！」

質問1

『十色のキセキ』で一番好きなエピソードはどれですか？

サトル

「まずさあ、この質問どーなの？ もっと話数増えてからすべき質問なんじゃね？」

兎にも角にも、回答が来たのだからちゃんと答えましょう！
結果としては、

P・19 押し合い 押し合い ポケスロン！（2）

P・5 少女の望み（1）

P・11 幸せとは何か（前）（1）

という結果になりました。

シレン

「一つ目のお便りを読みますね。」

『P・19 押し合い 押し合い ポケスロン！』……が一番好きです！

言い出しっぺのサトル君が負けるといふ展開にニヤニヤしまし

た（笑）。そして後半。トイロちゃんがアリア君を応援する場面が印象的でした。』ですって」

マサムネ

「もう一つの意見は、

『それぞれのポケモンとトレーナーらしさが全開＋トイロの揺れ動く心！ 更にはアリア、お前は何を目論んでいる！？と色々豪華だったので押させてもらいますw』だそうでごさる」

トイロ「な、なんかとても恥ずかしい結果だよ……」

君にとってはねww

トイロというキャラクターに微妙な変化が現れた『P・19』は読者の皆さんにとってこういう印象を与えたのだな。と作者としても興味深い結果となりましたw

シレン

「今度はP・5の意見ですね。

『ゴスロリに敗北したトイロが、己の弱さを嘆いて、まあちゃんに一緒に強くなつて欲しいと頼んだ場面。あそこが一番好きですw
今まで回りを極力巻き込まないよう努めてきたトイロが、初めて自分のポケモンを頼ったのですからw あそこは十色のキセキの中でもベストシーンだと信じて疑わないです！

』

トイロ

「もうやめたまえ〜！ 聞いているこっちが恥ずかしいではないか〜！！」（顔真っ赤）

これからのトイロの成長と変化にも注目してもらえると嬉しいです

サトル

「もう一個お便りを読むぜ。こっちはP・11の意見だな！」

『どれもこれも面白いエピソードばかりなので物凄く悩みましたが、ここは「P・11 幸せとは何か（前）」にて、ダーちゃんことダークライが、シレンにこっそりとロールケーキを買ってくれるよう頼むシーンを選ばせて頂きます。

ダークライというポケモンのイメージを良い意味で変えてくれたシーンであり、またこの『十色のキセキ』に登場するダークライの魅力と株をそれまで以上にぐーんと（ ）あげてくれたシーンでもあります。

僕個人が、意外なギャップのある人が大好きなので、このエピソードはまさにツボでした。なにより、あの遠慮がちな態度がすごく可愛いです。……なんてことをいったら、本人はものすごく嫌がりそうですけれど（笑）『だってよ。……すっげーダーちゃん好きなんだな、この人』（笑）

シレン

「ダークライの意外なギャップには、私も驚いたなあ。彼があんな風におねだりをしてきたことって今までなかったものw」

ダーちゃん

『え、ちよ、あれって“おねだり”の部類に入るものなのか！？ てか可愛いとか言うな！』（真っ赤

入るんじゃないの？

伝説の中でも悪タイプという理由で一番大好きなダークライのクールキャラをどうぶつ壊そうかと考えた結果、あぁなりました（何

サトル

「まあ、これについては実際賛否両論あるんじゃないかねえの？ ダークライのキャラぶち壊すんじゃないかねえよ！ みたいな意見もありそうだな」

そっちについてはノータッチ。こんなダークライがいたっていいじゃないかジャマイカ！

マサムネ

「……それはちょっと古いと思うのでござるよ。では、次の質問でござる」

質問2

『十色のキセキ』で一番好きな台詞は何ですか？

P・4 花咲く町 より

トイロ「ふふ。リツちゃんを見つけてくれたのが君で良かったよー」
(1)

『当時の彼女は何気なく言った一言なのだと思いますが、後々の彼絡みの展開と照らし合わせてこの場面を読み直すと、ニヤリとしてしまいます(笑)』

P・2 始まりの風 より

ルーくん(誠に残念なお知らせだが、口を塞がれてもテレパシーには何の影響もない。ざまあみろ)(1)

『ダーちゃんの“(……)……後で食べたいから、ロールケーキを買って
くれないか?”という台詞　と行きたいところなのですが、こ
こはルーくんの名セリフで!(笑)』

同じ回にサトルの格好良い台詞もありましたが、こちらをチョイ
スします。ごめんなさいサトル、反省はしていません)

トイロにはとことん忠実で礼儀正しく、その敵となるものには
容赦しないという、ルーくんの騎士気質がよく表れた、意外に見え
て実はかなり彼らしい台詞なんじゃないかと思えます。』

P・15　三日月と最強　より

イラ(……)ふんっ。あのケッキング娘じゃないが、めんどくせえぜ、
ほんと……)(1)

『台詞なのは若干微妙ですがこれです。だってやっぱり諦めて無
いじゃん。うん、何かこういった部分気に入りましたw　後は奇声
ばっかくるのかなあとか思ったりしているのでわざとそれを避けた、
としているのは隠された逸話(隠して無いじゃん)』

意外なことに奇声は一切ランクインされなかった、質問2でした。

トイロ

「突っ込ませてもらうなら、そもそも奇声がランクインすることが
おかしいのだ」

マサムネ

「(うにゃあああがランクインしていなくて良かったでござる……)」

「

シレン

「マサムネ君の奇声がランクインしなかったのは、ちょっと残念かなあ」

サトル

「思いつきり安心してている奴の隣でそういうこと言っなよ（汗）……って、やべ。も一つお便りが残ってたぜ。」

『これはですねえ。やっぱりまさむー（の「うにゃあああああ！」で』

ズガガガガッ！

サトル

「……………ガクガクブルブル」（体の輪郭に沿って壁に突き刺さったクナイに涙）

ちよ、ま、マサムネ！？

マサムネ

「その回答は絶対に読んではならぬ……………」（黒オーラ満載）

トイロ

「いいぞマサムネもつとやりたまえ〜」（ニコニコ）

シレン

「ちよ、トイロ！ マサムネ君もこの回答にはしっかり続きあるか

『十色のキセキ』は色をテーマにした物語ですが、トイロ・サトル・シレン・マサムネのメインキャラクター四人のイメージカラーはどんな色を想像しますか？

ある意味このアンケートで一番聞きたい質問だったりしました（何では、一名ずつ発表したいと思います！

サトル

「オレからはトイロの結果発表をするぜ！ まあ、誰でも予想が付くと思うが、こいつのイメージカラーには全員が『白』と回答してくれたぜ。理由としては、

『トイロちゃんはやっぱり白かなあと思います。

旅をするうちに、どんどん“色”がついていつているキャラだと思っています。夢とか友情とか……。』

『トイロは一見するとすごく個性的なキャラに見えて、実際は他人を遠ざけるためにあえて風変りな口調を実践したりするあたり、“白”という色が合うんじゃないかな、と思いました。』

『これはもう言わずもがな『白』で決まりでしょうw

何も知らない白。無垢な白。始まりの白。トイロのイメージを考えたら白のイメージがぴったりですw』

だそうだ。まあ、こいつは完全に『白』を強調したキャラでもあるから、当然っちゃ当然なのかもしれないけどな」

トイロ

「ボクからはサトルの結果発表をするよ。読者の方がイメージしたこいつの色は『黄色』『緑』『赤』の三色だ。では、一通ずつ理由を説明しよう。』

『サトル君は黄色だと思います。

明るい彼には明るい色を、と思ひまして（笑）。あと、個人的には黄色は“暖かな光の色”というイメージがありますが、サトル君

の優しい一面に合うかなあと。』

『緑です。サトルの色は、彼の“自然”なイメージから来たのかも知れませんが。自分の気持ちに素直に動いてみせてくれるし、なんだからで優しかったりするところも、良い意味で普通の少年、という印象です。』

『彼はなんと言ってもやっぱり『赤』でしょうか。』

トイロに対する想い、バトルにおける姿勢。それら全てがひたむきで情熱的！ 熱血サトルうちにはやっぱり赤色がびったりだと思えますw あんまり持ち上げすぎるとつけ上がりそうなのでこの辺でw(え)』

作者としては『黄色』がサトルの名前の由来（今は伏せますが）に近い理由だったのでちょっとびっくりでした。

でも、『緑』という意見にも納得。結果としては、サトルはものすごく自然に生きている男の子なんだなあ。とw

『赤』にも頷けました。情熱的というか熱血なサトルの一面には確かに『赤』をイメージさせますw

マサムネ

「次はシレン殿でござるな。シレン殿には『水色』が二通。そして『黄色』が一通届いているでござる。」

『シレンちゃんは水色のイメージです。』

名前の由来がセイレーンということ、ずっと青系のイメージを持っていました。女の子らしい彼女ですがとてもしっかり者なので、柔らかく、時にはシャキツとした感じの水色が合うなあと思います。』

『彼女は、薄い水色でしょうか。』

名前がセイレーンという点から海を思い浮かべる というのもありますが、それだけではなく、シレンは物事を冷静にクリーンな視点で見ることのできる子だと思っています。（すいません勝

手な憶測です)

あ、こういうと水色というよりも透明と言った方がいいのか？
だがそれだとトイロと被る！？ と、とにかくシレンのイメージカ
ラーは水色でお願いします！(蹴)

『シレンは黄色。ですな。』

シレンの黄色は、やはり彼女がコーディネーターということもあ
り、華やかな色がイメージ出来たのかな、と思います。』

コーディネーターというキャラクターから来る華やかさ。そして名
前の由来であるセイレーン、更には他の面々からすると大人びた性
格が彼女を一番イメージしやすい。ということなのでしょうが。
どちらもシレンの服装や目の色だったりしたのが個人的に面白かつ
たりしました(何

シレン

「最後はマサムネ君ですねw マサムネ君には『灰色』『赤』『緑』
の回答を頂きましたw

『マサムネ君は灰色かなあ？』

忍者というと忍びですから目立たない黒のイメージ。でも少年と
しての一面もしばしば見せてくれるキャラなので、純粋なイメージ
の白を足して灰色かな、と思いました。』

『マサムネは 赤というか、紅というか……。この色は本当に直
観で、理由を探そうとするとどうもこじ付けっぽくなってしまいま
す。でも、赤系以外はちょっとイメージ出来ない。そんな不思議な
感じですよ。』

『彼は、黄色と緑で迷ったのですが、やっぱり癒し系の緑でw

任務の時とプチ発狂時でのギャップがありすぎるw これはもは
や癒しというしか！』

忍者。たまに熱くなりやすく、そして超子供！ ……こんな感じな

のでしょうか？（誰に聞いている
意外だったのは彼のギャップが癒しという意見。あれは癒しなのか
！？）（ええ

トイロ以外は意見が割れた上に実はサトルのみ他キャラと色が被っ
ている結果がとても興味深かったですw

さて、トークも交えたら質問1〜3まででかなり文字数を食ってし
まいました。

これ以上はさすがに読む気が萎えるかと思うので、今回のスペシャ
ルは三本立てでお送りします！（今更

トイロ「続いては質問4〜7について答えるよ〜w」

では、また後ほど！！

一周年記念すべしやるその2!!
続いては質問4からお答えしますぞ!

質問4

トイロたちにいろんな服を着させられるとしたらどんな服を着て欲しいですか? (ポケモンも含む)

トイロ

「これは、ポケモンに二通。人間に一通お便りが来ているよ。まずはポケモンから紹介しよう。」

「ファッションにあまり詳しくないので、申し訳ないですが人間キヤラにはノータッチで(汗)。」

マサムネ君のピカチュウに忍者の服を着て欲しいです(笑)。」

「ルーくんに、タキシードなどの紳士的な服装をさせてみたいです
ね。エルレイドの腰の形からするに、特注のデザインが必要そうですけれど(笑)」

ふむ。どうやらポケモンのキャラクターにもイメージを持っているようだねw」

まさピカに忍者の服は本気で着せてみたい絶対きつと喜ぶでしょう
(笑)

サトル

「ルーの奴に執事服……。あの腰の形のズボン……。ぶっ! はははははははは! マジ受けるそれ早速作ろっぜ!」

シレン

「サトルくん大笑いするのが目的だったことまる分かりよ……（汗）
続いてはメインキャラクターの中から選ばれた人のお便りですねw
『これは悩んだのですが。一つだけ。』

まさむーに洋風の騎士の格好をさせてみたいっ！（何い

いや、まさむー忍びだからいつも服装、和のテイストじゃん？

だから、同じ主君を守る立場で洋風テイストの騎士の格好とかさ
せてみたらおもしろいんじゃないかなあ、なんて思いましたw』

確かに、これは着せてみたいわね！ コンテスト衣装に近いもの
があつたかしら？」

マサムネ

「え、ちょ！ 本気で着せるのでござるか！？」（滝汗）

トイロ

「面白いではないかやりたまえw」

サトル

「そつだそつだやつちまえシレン！」

マサムネ

「そこで意見を合わせてはダメでござる！」

……っつて、シレン殿！ 本気でござるかやめてくだされええええ
え！」（逃走）

シレン

「あ、逃げちゃった……」

誰かイラスト化してくださいこれは旅がらすも凄く見たい！（何）

質問5

もし、トイロたちの手持ちの中から一匹パートナーとして旅をする
としたら、どの子がいいですか？

トイロ

「これはある意味ポケモンの人気投票に近いね。先に結果を言え
ば、これは二通でダーちゃんことシレンのダークライが一位。次点
にまあちゃんことボクのマリルとルーくんことボクのエルレイドが
ランクインしたのだw」

シレン

「みなさんありがとうございます！ ダークライに寄せられた意見
を読みますねw」

『シレンちゃんのダーちゃん（ ）ですっ！』

伝ポケって言うのも大いにありますが、伝ポケにしては親しみや
すいキャラが好きです。強いんだろっなあ……！』

『うーん、これは悩む。色んな意味で強いブイのすけ。甘党のダー
ちゃん、小悪魔まさピカ……どれも個性的なメンツばっかで迷う。

ですが……ここはやっぱりダーちゃんで行ってみたいですねえw

シレンに対して一途なダーちゃん。トレーナーとしてここまでポ
ケモンに愛されてみたい！ という感情が素直に湧きますw

まあ、オマケとしてキレル男子とキレル三日月のオマケが付いて
きますが（苦笑）

問答無用でたたきつぶしますw（待て』

あ、あれ？ 意外と伝ポケらしくない意見ね？」

ダーちゃんに伝ポケらしさを今は求めちゃいけないという事か（違う

意外なギャップが人気を集めたようでこういうキャラにして本当に良かったと思っておりますw
ダーちゃんを連れて歩いてキレる一人と一匹に出会ったら問答無用で叩き潰しましょうw(マテ

マサムネ

「次は姫のまあちゃんに寄せられたお便りを紹介するでござる
『ここは、まあちゃん』ことマリルで。一生懸命なところが本当に好きなのです。」

実はダーちゃんも良いかなと思ったのですが、イラ&クレセリアに狙われかねないので、断念しました(笑)』

この方はダークライとまあちゃんのどちらにするかで迷ったよう
でござるな」

まあちゃん

『うふふ。でも、私を選んでもらえて嬉しいわ！ これで主人公のパートナーとしての立ち位置も守れたもの！』

まあちゃんそっちが理由かい(汗

サトル

「最後はルーに寄せられた意見だな。まったく、こいつに票を入れるなんてどんな意見だ？」

『ルーくんをお願いします。』

いや、エルレイドLOVEなんで。しかもあそこまで忠実だとなんだか自分が動くようになって気になりますwww』

あ、なーるほどね。ようするにエルレイドが大好きだったと」

貴重な意見に酷いコメントするんじゃないねえ！

自分もエルレイド大好きです。そこから生まれた妄想キャラことル

「くん」に票が入ったのは本当に嬉しかったですw w

質問6

もし、『十色のキセキ』のキャラクター（人間）と旅をするとしたら誰と旅をしたいですか？

これは要するにキャラクターの中で誰が一般人で常識人かを見分けるといふ心理テスト（撲殺

トイロ

「結果発表をしようではないか」。この質問で見事二票を獲得しトップに出たのはマサムネだよ。次点でボクとシレンが入ったのだ。つまりサトルとは誰も旅がしたくないということだねw w」

サトル

「一言余計だ！！ マサムネを選んだ理由を発表するぞ！（若干苛々）」

『マサムネです。メインキャラの中では一番気が合いそうだ、というのと、忍者ということもあって面白い話をいろいろと聞けそうだからです。……忍者屋敷の構造など？』

『これは、やっぱりまさむーでしょうか。』

トラブルに巻き込まれたとき用のボディガード代わりにもなるし

（おい

かたや人格崩壊の時は笑わせてくれたりと、一緒にいて飽きないような気がしますw

逆にサトルたちは勘弁でw 血まみれ抗争に巻き込まれたくないのでw まだ死にたくありませんw（撲殺』

……って、最後の『サトルっちは勘弁』って何だ！ そんなにオレが嫌かよてかなんでこの結果をオレに読ませた！！」

面白いからに決まっている！（爆）

忍者というキャラが旅で感じる危険に対して安心感を抱かせ、且つたまに面白いことになるのが選ばれた要因のようですw

これはコレで面白い結果ww

トイロ

「シレンを選んだ理由を読むね。」

『シレンちゃんですね。』

是非ともお友達になりたい、気遣いのできる優しい子です。そして何より、彼女から少し“女の子らしさ”を学びたいなあと（^_^）

^_^）』

だって。良かったね、シレンw」

シレン

「えへへ。なんだか恥ずかしいなあw

私からはトイロを選んだ理由を読みますね。

『トイロさんでお願いします。トイロさんの性格と一緒に旅するとう感じるのか気になりますww

あーでもシレンさんもいいなあ。着せ替え人形にされそうだけど

wwww』

ええ！？ 私別に誰も着せ替え人形になんてしてないわよ！？」

マサムネ

「それを素で言われると何も言えないでござるよ……」（汗）

（笑）

シレンは人柄。トイロもある意味人柄で選ばれましたw

サトル。君との旅は確かにデンジャラスだと私も思うよ……。

サトル

「次の質問行くぞ!!」

質問7

ちよつと趣向を変えまして、さて、あなたは『十色のキセキ』のキヤラクターと中身が入れ替わってしまいました。さて、それは一体誰でしたか？

喜ベサトル!

今回はお前とトイロが2票獲得の同率一位だ!!

サトル

「まじか!」

トイロ

「それは確かに嬉しいね。では、サトルを選んだ理由を紹介しようか」

マサムネ

「それでは某がお便りを読むでござる。

『サトルになれたら面白かなあ、とっています。ポケモンたちに好かれるのは、まんざらでもない、というか僕にとってはかなり羨ましい能力だったりします(笑)』

……ただ、大型のポケモンに出会った時はもしかすると命の危険があるかも知れないのが難点ですが……。

『いや是非サトル君で。男子ならモテモテ気分を是非味わってみた

いものですww』

……要するに、サトル殿のメロメロボディ体質を味わってみたい。ということですか」

サトル

「嬉しくねえええええ！ おいみんな！ マジでゴローンの大群に襲われたときの恐怖を今すぐに味わって来い！ 暗いし狭いしコケるしで死ぬかと思っただぞ！！」

シレン

「あはは……。本当にデンジャラスなんだね……。それじゃあ、私からトイロに寄せられたお便りを紹介するわね。」

『トイロちゃんを入れ替わって、トイロちゃんになりきりたいです（笑）！ あの喋り方、好きなんですよね。ついでにマサムネ君から「姫」と呼ばれてみて（略）』

『これは、やつぱり、トイロでしょうかw

トイロのフリして近づいてサトルっちを誘惑とかしてみたら一体どうなるかw

あ、でも待てよ？ サトルっちのことだからんなマネしたら調子乗って襲いかかってくるか？（汗）

トイロにばれたら消されそう（怯）』

トイロ

「ちょ、ボクの原因もサトルと似たり寄ったりではないか〜！」

サトル

「おいトイロお前二通目の人とすぐに入れ替わってこ」

トイロ

「黙れ愚か者」（殴

さてさて、サトルがトイレによってノックアウトされた辺りで、その2を終了しようと思います。

続けてその3では最後の質問8についてお送りしますよー！

マサムネ

「それでは後ほど。失礼するでござる」

ACT・6 3/3 一周年記念すべしやる つづきのつづき

一周年記念すべしやるその3！

最後は質問8ですよー！

質問8

好きなように誰にでも何でも聞いてください (ネタバレは含まず

さて、最後の質問はちよつぴりプライベートな質問も含まれておりますので、質問が寄せられたキャラクターをそれぞれの個室に呼び出してあります。

つてなわけで、ここからは作者の旅がらすがナビゲーターを務めま
すw

それでは、まず一部屋目に入ってみましょう。

失礼しますよー(ギイイ

マサムネ

「む。からす殿でござるか」

うん。最初の質問はまさむーことマサムネに来ているのですね。
早速質問しても良いかい？

マサムネ

「はい。姫の保身に関わることでなければ」

いやそこは大丈夫ですよ（汗）
えくと、じゃあ読むね。

『マサムネ君に質問です。』

お得意な忍法は何ですか（笑）？ 分身の術とかできます？ 興味シンシンですw
『
だつて。』

マサムネ

「某はポケモンの技と武器を複合させた体術系の忍法が得意でござる。」

よく使うのは“火遁・曼珠沙華”まんじゅしゃげや“雷遁・飯綱落とし”でござるな。たまに幻術や捕縛系の技も使用するでござるよ」

分身の術とか変わり身の術とかは出来ないの？

マサムネ

「分身はどちらかというと不得手でござるな。変わり身も逃走用のみの使用に限られているでござる。真に敵の目を欺くことを主体に置いた“変わり身”は某の」

あ、そこまでいいよそれ以上はネタバレに繋がるから。

マサムネ

「そうでござるか。では、質問は以上でござるか？」

うん。ありがとね。

マサムネ

「礼には及ばないでござる」

さてさて、次の部屋に参りますか。
失礼しますぞ。

サトル

「おいからず。一体なんで俺はここに呼ばれた？」

君に質問があるからだよ。読むよ？

『サトル ご自分の“体質”について、正直どう思っていますか？』
さてさて、さきほどその2ではいろいろと揉めていたけど、実際の体質のことどう思っているのかい？

サトル

「そうだなあ。なんつーの？ 一言で言えば『一長一短』かな」
ほうほう。

サトル

「いやさ、オレの体質って単純に言えば自分でポケモン探す必要ないわけなんだよ。草むらに近くで昼飯食つとけば、向こうから会いに来てくれるわけだし。」

ポケモンが無差別に出てくる場所とか気をつけて進めば、危険も一応は回避できんだよね」

確かにそれだけ考えれば便利だね。

じゃあ、『一長一短』の『一短』って何？

サトル

「出てくるポケモンが十中八九というか、ほぼ百パーで だつてことだよ。」

パーティの大半が っていると、バトルの幅が狭まっちゃう危険性があるんだよね」

例えば？

サトル

「“メロメロ”や特性の“とうそうしん”なんかがいい例だな。相手が で水タイプや地面タイプだったとき、技や特性を回避するときに のポケモンを出したくてもそれがガーディだけだったら致命的だろ？」

あ、確かに。

そいつは痛いなうんうん。

サトル

「だからからず。オレのパーティに ポケを」

それ以上の望みは聞かないしそのことについて今は答えないよ。私は次の部屋に行くから頑張って対策立ててなさい。

サトル

「なんだよ！ けちんぼ！」

けちんぼで結構コケッコー。

さあ、次の部屋に行きますよww

よし、次の部屋に着きましたね。ここでは誰が待っているのかな？
失礼します。

ブイのすけ

『んあ？ からすじゃねえか何でブイのすけ様をこんな場所に入れた早くシレンのところに戻せ！』

はいはいオレ様で偉大なブイゼルのブイのすけさん、貴方に質問が来ているんですよ答えてくださいな（棒読み）

ブイのすけ

『何！？ ブイのすけ様にファンレターか！？』

違つて。とにかく読むから答えてね？

『ブイのすけ ダーちゃんの印象について率直なコメントをどうぞ』

ブイのすけ

『……………』

黒い

ウザい

邪魔

変態且つ変なポケモンまじ伝ポケかオイオイ

てかシレンはブイのすけ様のモンだ手え出すんじゃねえよ！…！』

聞いたいてアレだが酷い言い様だな！！（汗）
しかも4つめ辺りが特に！

ブイのすけ

『いや、だって伝ポケのクセに弄られて散々な目に会いの、甘党

でこつそりおやつを頼みーの、拳句の果てにはブイのすけ様がシレンの風呂を覗くのをことごとく邪魔するーのなんだぜ!？」

前の二つは突っ込んでいいと思うけど最後のは絶対に君が悪いからまったく……。まあ、君らしい答えだからいいのかな？ ありがとうねw

ブイのすけ

『おう。困ったときはいつでも頼れよ！ なんとってブイのすけ様は偉大だからな!』

(……頼んだら頼んだで色々面倒くさそう) うん、じゃあ私は次の部屋に行くから、シレンのところに戻っていいよ。

ブイのすけ

『おう、またな!』

さてさて、コレが最後の部屋ですね。一体最後は誰が待っているのでしょうか？

失礼しまうー(囁んだ

ダークライ

『……囁んだな』

ルーくん

『囁みましたね、確実に』

うっさい。てか最後は二匹一緒か。あ、でも君らに同時に送られてきた質問があつたんだっけ。

ダークライ

『質問？ 一体なんだ？』

じゃあ、まずはダーちゃんから聞こうかな。

『ダーちゃん 甘いものが好きということですが、反対に辛いものが苦手だったりはしないのですか？』

はい、答えて〜w

ダーちゃん

『だから！ 私はダーちゃんなどというあだ名ではない！ てか名前を書き換えるな作者権限の無駄遣いだろっが！』

いいから質問に答えなよ（鬼）

ダーちゃん

『……………私の性格は“おだやか”なのでな。一応一番好きな味は“苦い”だ。

だが、甘いものは疲れたときなどに食べると本当に癒されるからかなり好きだ。

嫌いな味となると……………“辛い”だな。クラブの実はいつまで経っても苦手なままだ』

なるほど。そこはゲーム設定に準じた形なのね。

ダーちゃん

『シレンはいつも“苦いポフィン”しかくれない。たまには“にがあま”とか欲しいのだが……………』

いつまで経っても甘党だつて事を伏せていた君のせいだ私は知らんじゃあ、次にルーくんを送られてきた質問を読むね。

『ルーくん プロローグでも腕前の良さを披露していた料理。今現在、レパトリーはどのくらいですか？』
『そっぴやルーくんの得意ジャンルって何？』

ルーくん

『一応簡単な和洋中華は心得ています。一番最初に覚えたのはお嬢様と博士が共通して大好きなクリームシチューでした。その後、お嬢様の好きなオムライスや麻婆豆腐などを習得しています』

……何その本格的に作るとかなり大変なものから着手する挑戦心（滝汗）

ルーくん

『お嬢様に喜んでもらうためなら私は何でもします。今のところ、レパトリーはいくつだろう……。数えたことはないですが、まあ二桁……七、八十くらいでしょうか。』

本格的に作れるものとなると十と少ししかありません。一番難しいのは調味料を多く使うカレーや中華系、それにソースを使う料理ですね。あと僅かな分量で味が左右されやすいスイーツもなかなか研究のし甲斐があります』

簡単なレトルトタイプの食品が流行る昨今ではかなりクオリティ高い方でしょ！

何カレールーやマーボ豆腐の素があるのに一から作るうとしているの！？

君はシェフにでもなるつもりか！！

ルーくん

『お嬢様が喜び、その健康が持続されるのであれば私は喜んでこれからも多くの料理を習得します。そして、強くもなります』

何その騎士道精神（滝汗）

えっと、それじゃあ最後の質問行くな、これが君らに同時に送られてきたヤツだから。

『えーっと、んじゃあ、ルー君とダーちゃんに質問。』

ぶつちやけトイロとシレンをどう思ってる？ 曖昧に答えず正

直 にね 』

じゃ、ダーちゃんから行こうか

ダーちゃん

『なぜそれを今聞く！？ てか、本当に答えなきゃなんのか！？』

既にP・20で暴露しているくせに今更何を言うか。

良いから答えなさい。さあ早く！（爆笑）

ダーちゃん

『顔が完全に大爆笑状態だぞ貴様！』

……………し、シレンのことは、その……………す、好きだ』
（ボソリ）

え〜なにきこえない（棒読み）

ダーちゃん

『ああもう畜生！ ……好きだって言っただろつがあああああ！』

（大声）

うん、そうだよねそうだったねよく言った！（満面の笑み）

ダーちゃん

『か、帰る！』（ばびゅん！）

あ、行っちゃった……。

じゃあ、ルーくん行こうか。トイロのことってどう思っているの？

ルーくん

『どうって……必ずこの身を賭けてお守りする、一生に一度の大切な人だ』（大真面目）

……うっわ。空気読めよマジお前その真面目すぎる性格直すべきだわ。

騎士道精神まっしぐらすぎるでしょうがww

ルーくん

『………???』（しきりに首を傾げている）まあ、そうですね。とりあえず、お嬢様は絶対に守りますよ。特にサトルの魔の手からは』（どキツパリ）

……今、本編でトイロはサトルと一緒にいるよ?（汗）

ルーくん

『なっ！それを早く言ってください！お嬢様をヤツの手から守らなければ！』（ダッシュ！）

あ……。ルーくんまで行っちゃったよ。
でも、君が出るのはまだまだ当分後ろのほうだけだね（ボソリ）

……さてさて、一周年記念すべしやる最後の質問となりました。

この質問は、私宛ての質問なので、私だけでお答えしますw

『最新作、ブラック&ホワイトの内容は混ぜてみたい！』という気持ち
はございますか？』

え〜と、今の正直な気持ちを言いますと、『十色のキセキ』では『
ブラック&ホワイト』の内容を混ぜる気は一切ありません。

この作品は『金銀リメイク記念作品』と銘打った作品なのと、どう
せ『ブラック&ホワイト』を舞台に書くなら、また別の土台を用意
したいと思っているからです。

私は自分の作ったキャラクターに愛着を延々と引きずってしまいが
ちなので、もしかしたらトイロがイッシュ地方に行くこともあるか
もしれません。

ただし、それは『十色のキセキ』でもなく、また、トイロは主人公
でもないでしょう。メインであつても主人公格ではありません。多
分。

まずは、二年目に突入したことでここまで応援してくださった、ま
たこれからも応援してくださいと読者の方々にちゃんと自分の伝えた
い物語を伝えていけるよう精進してまいります。

まだまだ未熟者ですが、どうかこれからもよろしく願ひ
いたします。

『十色のキセキ』まだまだ続きます！
二年目も頑張ってゆきますぜ！

では、今度は本編でお会いしましょう！

ACT・7 二周年記念短編。もしハロ！（前書き）

お久しぶりです。

実は今日で『十色のキセキ』が二周年だった！ な、旅がらすです。

ハロウィンに作ってたんですね、この話。

あれ、半年近く更新されてない……？

ていうかコレについては最後の更新が一周年記念……だと！？

……と、とりあえず、短編2本収録の2周年記念『もしハロ！』スタートです！

ACT・7 二周年記念短編。もしハロ！

もしハロ！　　もしも十色のキセキの世界にハロウィンがあった
としたら〜

CASE・1 トイロとサトルとルーくん

「ルーくん！ Trick or Treat、なのだよ〜」

黒いロングワンピースに黒いマント、それに黒い三角帽子の黒ずくめ三点セットを身につけてバスケットを押しつけてきた白髪の少女に、庭の芝刈りをしていた一匹のエルレイドは驚きを隠せず硬直した。

ルーくんと呼ばれたエルレイドが、少女の言葉の意味を理解できないと言つように首を傾げると、少女は大きく肩を竦めた。

「ルーくん。今日は10月31日。ハロウィンのお祭りなのだよ〜。そんなことも忘れたのかね〜？」

「るりるりる〜」

そう言つて、少女はくるりとその場でターンを決めた。その背中には、“みずねずみポケモン”のマリルがにししと楽しそうに笑っている。

言われて、エルレイドもハツとした。確かに今日はハロウィンだった。そう言えば、昨晚からマリルにやたらとせがまれてかぼちゃのケーキとプディングを作らされたのである。

白髪の少女　トイロは何が楽しいのかマリルと楽しそうに小さく跳ねている。

「今日は、子供が仮装をにご近所にお菓子を強請りに行く日なのだ〜。まずはルーくんからだよ〜」

とても素晴らしく都合の良い解釈の仕方だった。

だからお菓子を渡したまえ〜。と、間延びした独特の口調で再び

バスケットを前へと出した少女に、エルレイドは思わず笑みをこぼす。自分より少し背の小さい少女の頭を優しく撫でると、エルレイドはキッチンに向かおうと屋敷に踵を返した。

そのとき、

「ちよおつと待ったあー！ー！」

勢いよく、目の前の門が開かれる。そこに仁王立ちをしていたのは、少女の幼なじみであり、エルレイドにとってはあまり好ましく思えない少年 サトルだった。

サトルもまた、バスケットと衣装を決め込んでいた。いつもより頭部が長く見え、肩幅が広く見えるのは、おそらくフランケンシュタインの怪物を模しているためだろう。少し動きづらそうだったが、それでもサトルは楽しそうにステップを踏みながらトイロたちの元に歩み寄った。

「おつまえなあ！ ハロウインは菓子貰うだけじゃねえぞ！ 菓子をくれない奴に悪戯するのが楽しーんじゃん！」

こちらもちらで、素晴らしく都合の良い解釈をしていた。

なんだそれは、と思いつながら盛大にため息をついたエルレイドの横で、サトルはトイロにじり寄る。

「につししし。お前、まだ菓子貰ってないだろ？ だったら悪戯タムってことで良いよな！？」

「よくないよ！ というか、何故貴様にボクが悪戯をされなければならぬのかね！？ さっさと帰らたまえ！」

「うるせえ！ こんなときぐらいじゃないと、お前に正々堂々とピ―なことやピーなことができねえんだから！」

確実に不純且つ嫌らしいワードが出てきそうな悪戯をしようとしていた。

だが、その言葉に誰よりも早く、エルレイドは括目する。

「さあさあさあ！ 大人しくオレに悪戯され」

風を切る音が、静かに辺りに響いた。

やがれ。とまで、サトルは発音することができなかった。硬直した彼の目の前を、横一線に断ち切られた頭部が落ちる。ハリボテのそれは地面に落ちる少し手前で風に吹かれ、空しく宙を転がるように何処かへと飛んでいった。

「……エルツ」

エルレイドが、静かに肘の刃を収納する。彼はそのまま白目を剥いたまま気絶したサトルの首根っこを掴むと、門の外までサトルを引き摺り外へと放り出した。

しばらくして、門の閉じる音が庭に鳴り響く。エルレイドがトイロの元に戻って彼女に恭しく頭を下げると、トイロは誇らしそうにエルレイドに微笑んだ。

「サトルも馬鹿だね。あんなことしなければ、ルーくんのかぼちゃデザートにありつけただろうに」

「ルツ」

トイロの言葉にエルレイドが苦笑いを浮かべながら小さく肩を竦めると、トイロはエルレイドの左腕に自身の右腕を絡ませた。

「では、楽しい楽しいハロウィンティータイムと行こうではないか。エスコートを頼むよ、ルーくん」

「るりっ！」

そう言っただけでほほ笑むトイロとマリルに淡い笑みを返しながら、エルレイドは屋敷に向かって歩き出した。

CASE・2 ダーちゃんとマサムネのピカチュウと

『ダーちゃんダーちゃん、Trick or Treatだよ！』
濃紫の三角帽子にマントを羽織って縋りついてきたピカチュウに
対し、ダーちゃんことダークライは言葉を失うほか自身の心境を明
確に表す術が思いつかなかった。

とある町のポケモンセンターで、町のお祭りでもあったのか盛大
に菓子が配られており、パートナーであるシレンからいくつか苦味
の効いた菓子を貰ったダークライが、宿泊部屋でいそいそとそれを
取り出した途端の出来事。

共に旅をしている仲間の一人 忍者で国際警察の少年、マサム
ネの手持ちであるピカチュウの奇妙奇天烈な行動にダークライは首
を傾げた。

『とりつく……とは何だ、ピカチュウ』

『ええ〜っ！ ダーちゃんハロウィン知らないの〜！？ 知らない
でお菓子貰ったの〜！？』

ダークライの言葉に、ピカチュウが驚いたように飛び跳ねた。下
の階に響くから止せとダークライが止めると、ピカチュウは大きく
肩を竦めた。

『ダーちゃん。今日はハロウィンっていうお祭りの日なんだよ〜。
まさむーと一緒に別の地方に行ったときに僕も覚えたんだ〜』

『む。そうなのか。しかし、それとこの菓子と何の繋がりがあると
言うのだ？』

ピカチュウに説明されて、ダークライは再び首を傾げる。長い時間、たった一匹、新月島で時間を過ごしていたダークライにとって、お祭りなどの行事はほとんど未知の領域であった。

ダークライが知らず、自分が理解していることがあったのか少し嬉しいのか、ピカチュウは鼻を高々と上げて『よし、教えちゃおう』と両手を腰にあてた。

『ハロウィンっていうのは、ある宗教のお祭りなんだって。この日は悪いユースレイさんがみんなのお家に悪戯をしにやって来ちゃうから、それを防ぐためにかぼちゃをくり抜いたランタンを玄関に置いて門前払いしちゃうらーよ』

『ほう。では町の至るところに奇妙な装飾を施されたカボチャが置いてあったのは、それが理由と言うわけか』

言われて、ダークライはモンスターボールから見ていた昼間の町の景色を思い出す。みな楽しそうに仮装をし、菓子を配り歩き、そして談笑をしていた。宗教染みた雰囲気は一切感じさせない祭りだったので、そんな由来があったことにダークライは驚いていた。

『んー。まあ、この町はお祭りが毎年たくさんあることでユーマイらしいしね。多分、まさむーが教えてくれたことをちゃんと知っている人は少ないんじゃないかな?』

『なんだ、やはりマサムネから教わったのか』
『うげっ』

ピカチュウのあまりに自然すぎるネタばらしに、ダークライはくつくつと笑う。ピカチュウはほんの少しだけ頬を膨らませたが、すぐに『つづきつづき!』と話を戻した。

『でね! この日は子供たちがお化けに仮装をしてご近所さんを『Trick or Treat』って言って練り歩くんだ。お菓子をくれたらそのまま帰るけど、お菓子をくれないとホークに悪戯しちゃうぞ! ってね』

『ふむ。実際にお化けが目に見えないことから来る不信感を失くすために、わざと可視化している、と言うことか。なるほど、確かに

効果的だな』

『……ダーちゃん、ムズカシー解釈の仕方するんだね』

感心して頷くダークライの横で、ピカチュウはベッドによじ登りながらげんなりしたように目を細めた。だが、その表情もすぐに消えてダークライの腕を小さな両手で揺する。

『だーからー。僕』Trick or Treat』って言ったでしょ？ お菓子ちよーだい！ じゃないと悪戯しちゃうよー！』

『だ、ダメだ！ これは私がシレンから貰った菓子だぞ！ というかお前はマサムネから貰えば良いだろうが！』

『まさむーから貰ったお菓子、ぜーんぶ食べちゃったもん。まだ食べたいのにぶらたんもばくたんもじゅーたんもふーたんもどすたんも『ダメ』の一点張りなんだもん！ せっかくシレンちゃんが見繕ってくれた仮装して可愛くウインクしても、『んなことして効果あると本気で思っているのか？』なんだよ！ 酷いでしょ？ 僕可哀想でしょ？ ね、ね、ねえったらあ！』

『………』

だから自分のところに来たと言うのか。まだ知りあって時間は経っていないが、このピカチュウ。無邪気なようでかなり真っ黒であることをダークライは重々承知していた。マサムネの他の手持ちからも、『あいつに何か強請られても押しきれ。じゃないと一生力モられる』と教わっていた。

『ダメだ。あまり食べ過ぎると健康に良くないと聞くぞ。それはお前の“仕事”にも差し支えるんじゃないのか？』

『甘いものはベツバラなんだよ、ダーちゃん。僕おいかけてっこ大好きだし、なーんかたくさん食べても体重増えないんだよね』

『………』

非常に困った。気をつける、と忠告は受けていたものの、あしらい方までは教えてもらっていなかった。

さて、一体どうしたものかとダークライがため息を一つついた時だった。

「だ、ダークライ殿！ いるでござるか！？」

突然、ドアを激しく叩く音がしたかと思うと、真っ青な顔をしたマサムネが部屋に飛び込んできた。

マサムネの珍しい姿に、ダークライも思わず眉を顰める。が、同時にちやうど良かったとも思った。

『マサムネ。ピカチュウが菓子をせがんできて困っていたんだ。どうにかならないか？』

「それどころじゃないでござるよ！ もう某だけでは対処しきれないのでござる！」

『……………？』

ダークライの要望を遮り、血相を変えて口を走らせるマサムネにダークライは何事だと小さく首を傾げる。

と、そのとき、廊下の向こう 階下のフロアだろうか から、ものすごい轟音が聞こえてきた。

続けて、

『シーレーン！ 悪戯させろっ！ そのナイスなボディに悪戯させろ！ 菓子なんてくれてやるっ！』

「トイロー！ ルーの奴がいない且つポケモンたちも治療中の今！そしてハロウィン！ することは一つだろ！」

「きゃああ！ ブイのすけ！ こんなところでそんなことしないでえ！」

「ぎゃああああ！ 来るな！ 来るな！ 貴様など赤の他人だ！ 寄るな！ ボクに寄らないでええ！」

とんでもないワードがダークライとピカチュウの耳を叩いた。階下の様子を想像したのか、ピカチュウが大きく息をつく。

『……………うわぁ。まさに下はジゴクエズ、って奴だねえ』

瞬間、ダークライの手の中にあつた菓子が霧散した。

『……………オロス。ブイのすけ、オロシテヤル！』

瞬く暇すらなく、ダークライの姿が部屋から消え、階下の轟音がさらに激しくなった。

「なっ！　ちょ、ダークライ殿！　物を壊さぬようにしてくださいませ！」

轟音から何を察したのか、マサムネも慌てて階下へと踵を返す。

部屋の中には、ピカチュウといくつかの菓子だけが残された。

ピカチュウはしばらく階下の轟音に耳を傾けていたが、やがて嬉しそうににんまりと微笑んだ。

『なぐんかよくわかんないけど、お菓子ゲットできちゃった』

そう言つて、“むじゃき”な性格のピカチュウは、ダークライのお菓子　たつぷりと“苦い”ドリの実を混ぜ込んだカボチャチョコレートを両手に掲げる。

『抹茶チョコかなあ？　いったただっきまーす』

そうして、ピカチュウは盛大に超苦いドリの実チョコレートを齧りついた。

数時間後、宿泊部屋であまりの苦さに一口で気絶したピカチュウが発見されたのは、また別の話。

ACT・7 二周年記念短編 もしハロ！（後書き）

いかがでしたでしょうか。

もしもハロウィンが十色のキセキの世界にあつたら……という考えの下、午前中から書きました。

……他の話もこのくらい爆走して書ければいいのに（ボソリ

相変わらず短編ばかりの出演となつているルーくと、本編で大活躍中のダーちゃんを主体に置いたハロウィンスペシャルです。

ルーくとダーちゃんは似ているようで立ち位置がちょっと違いますね。

本編で出逢つたときにネタ被りしないようになるのはありがたいことだと思えます。

いや、しかし、まさかダーちゃんがここまで壊せるキャラだったとは。自分でも驚き桃の木楠さんです。

最初の設定ではね、カツコイイままのはずだったのにね。ブイのすけが絡むと一気にネタ化するダーちゃんが大好きです。

ルーくんもトイロだけだただの執事ていうか家政夫ですけど、サトルが絡むことでいい味出してくれます。

そういう意味では、サトルとブイのすけは物語の上で中々素敵なスパイスです。

そしてピカチュウ。この子も最初おっとりな子だったはずが、いつのまにか“むじゃき”に……。

あれです。おっとりしているようにも見えろけど本質の性格は“むじゃき”ってことで。

ラストのオチはただ食わせるだけなんてつまらなすぎるので（撲殺

では、次は本編で会いましょう！

さらばあっ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8315j/>

十色のラジオ放送局

2011年10月31日14時31分発行